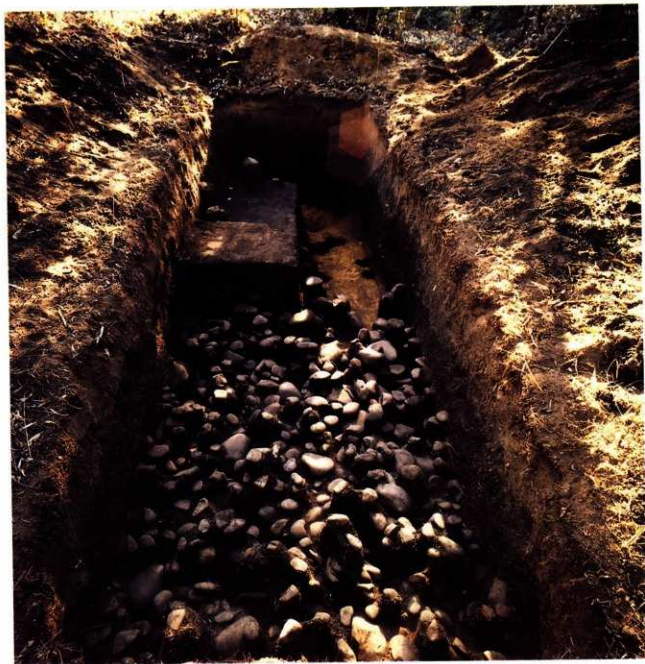


史跡生目古墳群周辺遺跡

発掘調査報告書

1996

宮崎市教育委員会



22-1 トレンチ



小形仿製鏡 (203)



石刻 (204)

序

宮崎市では、「人にやさしいまちづくり」をテーマに、地方中核都市としてふさわしい文化の香り豊かな街を目指しております。近年のリゾート開発に伴います都市景観の変化、農林部の変容、緑地の減少は、地区伝承文化の衰退・廃絶を引きおこし、古き宮崎と新しき宮崎との調和という難しい問題が生じております。このような情勢の中、宮崎市制70周年記念事業の一環として、かつ宮崎市西部地区の核として、西部運動公園と史跡生目古墳群を一体化した整備を行うことはたいへん有意義かつ重要なことと考えております。

生目古墳群は、昭和18年9月8日に国の史跡の指定を受けて以来全くと言っていいほど調査や研究がなされてきませんでした。宮崎市教育委員会では、昭和51年度に最初の保存管理計画を策定しましたが、諸般の都合により実施するに至りませんでした。しかし、今回、宮崎市制70周年記念事業として生目古墳群の保存整備事業に着手することとなり、その事前事業として生目古墳群が位置する跡江台地の遺跡確認調査を行いました。その結果、古墳群だけでなく、周囲には数多くの遺構が多時代にわたり存在することが判明し、今後の保存整備計画にとりまして貴重な資料が得られました。

本書は平成5年度から平成7年度にかけて行いました発掘調査を報告するものですが、史跡整備への皆様のご理解と学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導、ご助言いただきました、諸先生方、並びに献身的に作業をしていただきました方々に感謝申し上げます。

平成8年3月

宮崎市教育委員会

教育長 稲 倉 宗 知

例 言

1. 本書は国指定史跡生目古墳群保存整備計画策定に伴う周辺遺跡確認調査の発掘調査記録の報告書である。
2. 発掘調査は、平成6年1月11日～平成6年2月28日、平成7年1月17日～平成7年3月24日、平成7年10月27日～平成8年1月16日の3年度にわたり、宮崎市教育委員会が行った。
3. 本書で使用する生目古墳群の古墳番号は昭和18年指定当時の番号ではなく、昭和51年度作成「保存管理計画策定 史跡 生目古墳群」に依るものである。従って昭和18年指定当時の番号を使用する際には、旧〇号と標記する。

4. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
調査総括	文化振興課	文化財係長	井手上 仁 悟
調査事務		主 事	岩 城 勝 志
調 査 員		主 事	中 山 豪
		主 事	鳥 枝 誠 (平成6・7年度)
		主 事 補	時 任 直 也 (平成7年度)
補 助 員	嘱 託	椎 由美子	溝 淵 利 子
		松 永 光 雄	久 富 なをみ
発掘調査指導	文化庁文化財保護部記念物課		
	文化財調査官	西 田 健 彦	

5. 本書の執筆は中山、鳥枝が共同して行った。
掲載した図面の実測・製図・図版の作成は中山・鳥枝・椎・溝淵・松永・久富が分担して行った。
写真撮影は、主に中山・鳥枝が行ったが、空中写真については、株式会社スカイサーペイによるものである。
3号墳周辺の地形測量は株式会社九州測地公社によるものである。
6. 本書の編集は中山・久富が行った。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1.	遺跡の立地と環境	1
2.	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	調査の記録	6
1.	平成5年度の調査	6
(1)	調査の概要	6
(2)	遺構と遺物	6
1)	遺構について	6
2)	遺物について	12
2.	平成6年度の調査	16
(1)	調査の概要	16
(2)	遺構と遺物	16
1)	遺構について	16
2)	遺物について	31
3.	平成7年度の調査	38
(1)	調査の概要	38
(2)	遺構と遺物	38
1)	遺構について	38
2)	遺物について	52
第Ⅲ章	まとめ	61

挿図目次

第1図	遺跡周辺地図	2
第2図	史跡生目古墳群現況図	3
第3図	平成5年度調査トレンチ位置図	7
第4図	2-1~3トレンチ実測図	8
第5図	3-2、3トレンチ実測図	8
第6図	3-2トレンチ内二段掘土壌実測図	8
第7図	4-1~4トレンチ実測図	9
第8図	5-1~5トレンチ実測図	10
第9図	5-4トレンチ葺石落下状況図	11
第10図	5-5トレンチ葺石落下状況図	11
第11図	平成5年度出土遺物実測図	13
第12図	平成6年度調査トレンチ位置図	15
第13図	9-1トレンチ実測図	17

第14図	9-1 トレンチ地下式横穴墓実測図	17
第15図	9-2 トレンチ実測図	18
第16図	9-2 トレンチ内二段掘土壌実測図	18
第17図	10-1、2 トレンチ実測図	19
第18図	11-4 トレンチ実測図	19
第19図	11-4 トレンチ内地下式横穴墓実測図	20
第20図	12-1、2 トレンチ実測図	21
第21図	13-1~3 トレンチ実測図	21
第22図	13-2 トレンチ内二段掘土壌実測図	22
第23図	13-3 トレンチ内二段掘土壌実測図	22
第24図	14-1、2 トレンチ実測図	24
第25図	14-1 トレンチ葺石落下状況図	24
第26図	15-1 トレンチ実測図	24
第27図	A-1~8 トレンチ実測図	25
第28図	B-1~4 トレンチ実測図	26
第29図	C-1、2 トレンチ実測図	26
第30図	平成6年度出土遺物実測図1	28
第31図	平成6年度出土遺物実測図2	29
第32図	平成6年度出土遺物実測図3	30
第33図	平成6年度出土遺物実測図4	32
第34図	平成6年度出土遺物実測図5	33
第35図	平成6年度出土遺物実測図6	34
第36図	平成7年度調査トレンチ位置図	36
第37図	16-1、18-1 トレンチ実測図	37
第38図	19-1、2 トレンチ実測図	37
第39図	E-1 トレンチ実測図	39
第40図	E-1 トレンチ内二段掘土壌実測図	39
第41図	E-1 トレンチ内溝状遺構実測図	39
第42図	E-2 トレンチ実測図	40
第43図	円形周溝墓主体部実測図	40
第44図	E-3~5 トレンチ実測図	41
第45図	F-1 トレンチ実測図	41
第46図	22-1 トレンチ北壁セクション実測図	41
第47図	22-1 トレンチ葺石落下状況図・拡張部実測図	42
第48図	G-A トレンチ実測図	44
第49図	G区1号土壌実測図	44
第50図	G区2号土壌実測図	44
第51図	G区3号土壌実測図	45

第52図	G区4号土壌実測図	45
第53図	G-Bトレンチ実測図	46
第54図	G区8号土壌実測図	46
第55図	G-Cトレンチ実測図	48
第56図	G-Dトレンチ実測図	48
第57図	G-Eトレンチ実測図	49
第58図	G-Fトレンチ実測図	50
第59図	G-Gトレンチ実測図	50
第60図	平成7年度出土遺物実測図1	51
第61図	平成7年度出土遺物実測図2	52
第62図	平成7年度出土遺物実測図3	53
第63図	平成7年度出土遺物実測図4	54
第64図	平成7年度出土遺物実測図5	55
第65図	平成7年度出土遺物実測図6	56
第66図	平成7年度出土遺物実測図7	58
第67図	平成7年度出土遺物実測図8	59

図 版 目 次

図版1	2-2トレンチ地下式横穴墓	65
図版2	3-2トレンチ二段掘土壌	65
図版3	4-1トレンチ土器出土状況	65
図版4	5-2トレンチ	65
図版5	5-4トレンチ	66
図版6	5-5トレンチ	66
図版7	平成5年度出土遺物	66
図版8	平成6年度調査区全景	67
図版9	9-1トレンチ地下式横穴墓塋墳	67
図版10	9-1トレンチ地下式横穴墓玄室	67
図版11	9-2トレンチ円形周溝墓	68
図版12	同主体部	68
図版13	同横口式土壌	68
図版14	10-2トレンチ	69
図版15	11-1トレンチ土器出土状況	69
図版16	11-4トレンチ地下式横穴墓	69
図版17	13-2トレンチ二段掘土壌	70
図版18	13-3トレンチ二段掘土壌	70

図版19	14-1 トレンチ	70
図版20	A-5 トレンチ溝状遺構	71
図版21	A-8 トレンチ二段掘土壌	71
図版22	B-1 トレンチ	71
図版23	B-1 トレンチ土壌(玄室か)	72
図版24	B-2 トレンチ溝、盛土	72
図版25	C区全景	72
図版26	C-1 トレンチ二段掘土壌	73
図版27	C-2 トレンチ地下式横穴墓	73
図版28	C-2 トレンチ横口式土壌	73
図版29	C-2 トレンチ小型壺出土状況	73
図版30	平成6年度出土遺物1	74
図版31	平成6年度出土遺物2	75
図版32	E区全景	76
図版33	E-1 トレンチ二段掘土壌	77
図版34	E-1 トレンチ溝状遺構	77
図版35	E-2 円形周溝墓	77
図版36	E-2 横口式土壌	78
図版37	19-2 トレンチ	78
図版38	22-1 トレンチ	78
図版39	同基段部	78
図版40	G区全景	79
図版41	G-A トレンチ1号土壌	79
図版42	G-A トレンチ4号土壌	79
図版43	G-A トレンチ	80
図版44	G-B トレンチ	80
図版45	1号住居出土状況	81
図版46	1号住居壺出土状況	81
図版47	G-B トレンチ8号土壌	81
図版48	G-B トレンチ貯蔵穴	81
図版49	G-C トレンチ	82
図版50	G-D トレンチ	82
図版51	G-E トレンチ	82
図版52	G-F トレンチ	82
図版53	G-G トレンチ	83
図版54	平成7年度出土遺物1	83
図版55	平成7年度出土遺物2	84

第I章 はじめに

1. 遺跡の立地と環境 (第1図、第2図)

生目古墳群の立地する跡江台地は、宮崎市街地から北西の方向に約7km離れた生目地区に位置し、大淀川が大きく湾曲する部分に沿うように東西約1.3km、南北約1.2km、標高20m超の洪積台地である。

本台地上には、縄文時代早期の塞ノ神式土器・押型文土器を出土した跡江貝塚が、台地南端に位置している。また、弥生時代の遺物が台地上の畑などで表採されており、遺構の存在が確実視されている。古墳時代の遺跡は墳丘のある古墳群はもとより1号墳の中腹に5基の横穴、1号墳と3号墳の間の高まりの部分に4基の横穴が発見されている。この横穴から貝釧、貝製雲珠、馬具、工具、耳環、須恵器、土師器等が出土し6世紀後半に比定され、古墳群との関係が注目されている。続く中世では跡江城が台地上に造られ、その中心は城平、城ノ下等の地名から台地南部と想定されている。

跡江台地周辺域の状況を見ると、大淀川の対岸には佐土原町より続く丘陵が宮崎平野へと開析しており、この丘陵北部の通称垂水台地にはナイフ形石器、角錐状石器、剥片尖頭器等を出土した旧石器時代後期の遺跡として金剛寺原第1遺跡・第2遺跡、垂水第1遺跡、阿部ノ木遺跡が所在すると共に、縄文時代早期の吉田式、前平式、塞ノ神式、押型文土器等を出土した伊屋ヶ谷遺跡、小原山第1遺跡・第2遺跡も所在し、枝丘陵の西端(大淀川に接する部分)には、跡江貝塚と同時期に比定される柏田貝塚も所在する。さらに丘陵の中腹部には県指定史跡瓜生野古墳(横穴)、池内横穴が群を形成して存在している。また丘陵中央部には中世から近世初頭にかけての山城宮崎城が造られ、丘陵南部においては前方後円墳4基を含み、さらに地下式横穴墓を墳丘下に有する県指定史跡下北方古墳、下北方塚原地下式横穴墓群が所在する。

跡江台地周辺は北側に現在の集落があるほかは、微高地に畑、低地に水田が南方約5kmの国道10号線まで延々と広がっている。その国道10号線より立ち上がる丘陵域には円墳と横穴墓からなる県指定史跡生目村古墳や中世山城の石塚城・高鉾城等が存在する。

また、国道10号線から東の大淀川沿い部分には県指定史跡大淀古墳(横穴)が所在し、なかでも大淀古墳3号は、その周溝や墳丘から出土した壘形埴輪から4世紀末に比定されており、生目古墳群と下北方古墳群との関係が注目されている。

2. 調査に至る経緯

生目古墳群は昭和18年9月8日の国の史跡指定以後も台地上の地目は山林、原野でありほぼ旧状を残していたと考えられるが、生目村当時の昭和36年に宮崎県のみかんブームにのりオレンジベルト化構想により、上ノ迫土地改良事業が行われたため台地の形状が大きく変わると共に数多くの古墳が形状の変化や消滅の憂き目にあっている。

昭和37年に当時の生目村では、国庫補助事業として史跡生目古墳群保存施設設置工事を行い、古墳群本標石、道標石、古墳境界標石、古墳番号標石、説明板を埋設、設置し、より以上の毀



- | | | | | |
|---------|---------|---------|-------|--------|
| 1 生目古墳群 | 2 瓜生野古墳 | 3 柏田貝塚 | 4 宮崎城 | 5 池内横穴 |
| 6 下北方古墳 | 7 大淀古墳 | 8 生目村古墳 | 9 石塚城 | 10 高嶺城 |

第1図 遺跡周辺地図



第2圖 史跡生目古墳群現況圖

損の防止を図っている。

宮崎市教育委員会では、昭和51年度に国庫補助事業として史跡生目古墳群保存管理計画を策定し、自然史跡公園としての方向を示している。その後、平成4年度になりようやく宮崎市制70周年記念事業の一環として、史跡生目古墳群の保存環境整備事業が行われることとなった。そのため宮崎市教育委員会としては、保存環境整備事業の基本設計に先立ち古墳の範囲確認や周辺地区の遺跡や遺構の確認の必要が生じたため、国の補助を受け平成5年度から平成7年度の3年度にわたり、未指定地番をトレンチによって発掘調査したものである。

第Ⅱ章 調査の記録

1. 平成5年度の調査

(1) 調査の概要 (第3図)

平成5年度は、平成6年1月11日から2月28日までを調査期間とし、1・2号墳のある独立丘陵と3号墳から6号墳周辺までの台地北部を調査範囲としている。

1号墳については全体が指定地番であるため調査は行っていない。

2号墳周辺については丘陵縁辺に北から順に旧3、4、5号墳と思われる小さな盛り上がりを確認されたため、旧2、3号墳間に2-1トレンチ、旧3号墳東側に2-2トレンチ、旧3、4号墳間に2-3トレンチを設定した。

3号墳の周辺についても指定地番が大半であったため、旧14号墳（以前九州電力の鉄塔が建てられていた。）の東側と後円部の間に3-1トレンチ、3号墳西側の周溝外部に3-2トレンチ、3-3トレンチを設定した。

4号墳周辺では、4号墳を中心に東西南北に十文字のトレンチを設定し、東を4-1トレンチ、北を4-2トレンチ、西を4-3トレンチ、南を4-4トレンチとした。

5号墳周辺については5号墳の東側に3本、西側に2本のトレンチを設定し、東側の南から北に5-1トレンチ、5-2トレンチ（6号墳西側トレンチ兼用）、5-3トレンチ、西側の北から南に5-4トレンチ、5-5トレンチとした。

その結果、地下式横穴墓、二段掘土壇、溝状遺構等が検出された。

(2) 遺構と遺物

1) 遺構について (第4図～第10図)

2-1トレンチでは地表より約60cm掘り下げた所で旧2号墳寄りに浅い溝状遺構の壁が検出されたが、下端は検出されていない。また、旧3号墳寄りに浅い溝状遺構が検出された。この溝状遺構は、溝中央から上端まで約1.5m、深さ約15cm、下端幅約80cmである。

2-2トレンチでは、2号墳に向かって玄室を持つ地下式横穴墓の堅壇部が検出されたが、調査は堅壇を半截した形で行い完掘はしていない。堅壇は南北（主軸方向）が約80cm、東西が約150cm（推定）で、羨門はドーム状で幅約50cmあるが、羨道は埋土されている。堅壇周囲がテラス状になるのは旧3号墳の周溝と切りあっている可能性がある。

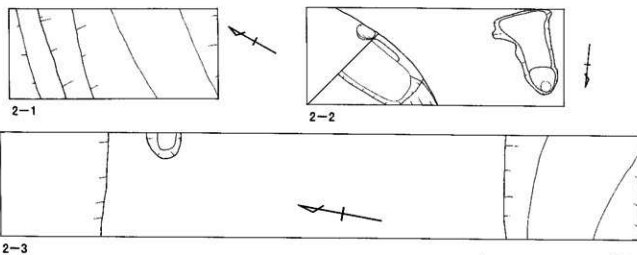
2-3トレンチでは、旧3号墳寄り底部は未検出であるため深さ60cm+ α の溝状遺構、旧4号墳側に溝中央から上端の長さ約1m、下端幅約1m、深さ40cmの溝状遺構が検出された。

3-1トレンチ、3-3トレンチでは、遺構、遺物は検出されなかった。

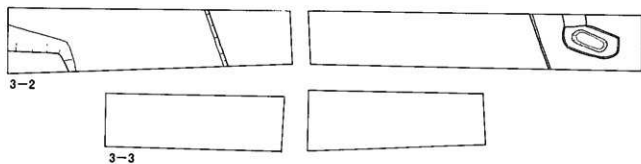
3-2トレンチは、東側に溝状遺構、西端に二段掘土壇1基が検出された。溝状遺構はトレンチの壁付近に痕跡的に残るもので性格等は不明であり、土地改良事業による擾乱の可能性もある。二段掘土壇は一段目をほとんど削平されていると考えられ、現状では長軸約1.6m、短軸約80cm、深さ20cmを残すのみである。二段目については、上端の長軸約1.1m、短軸約40cm、



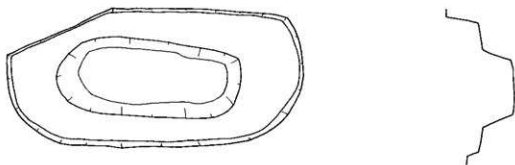
第3図 平成5年度調査トレンチ位置図



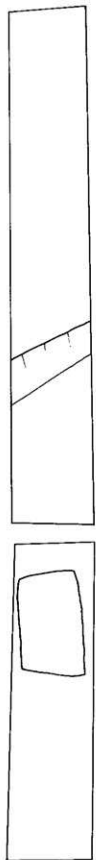
第4図 2-1～3トレンチ実測図



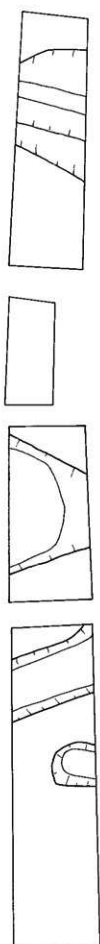
第5図 3-2、3トレンチ実測図



第6図 3-2トレンチ内二段掘土壌実測図



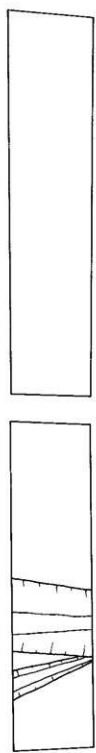
4-1



4-2



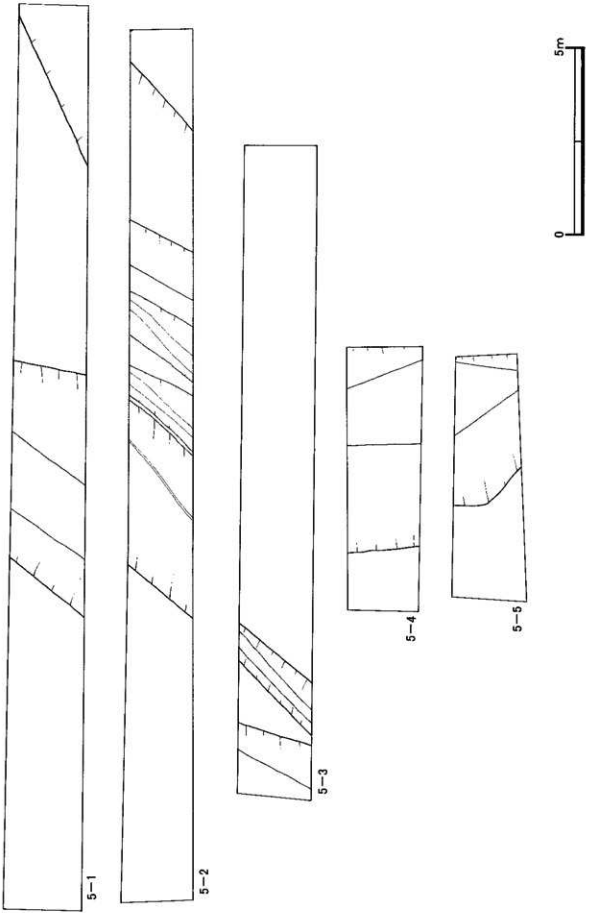
4-3



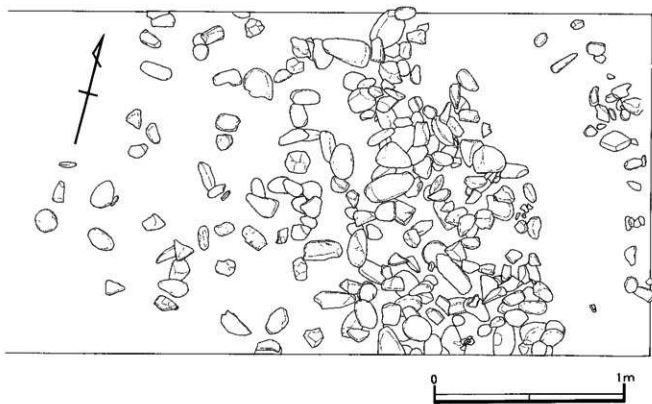
4-4



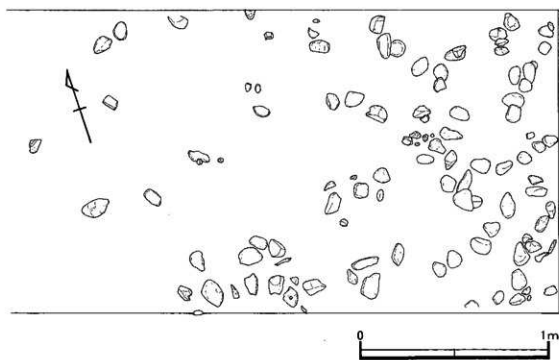
第7図 4-1~4-4の断面図



第8図 5-1~5-5トシ子家測図



第9図 5-4 トレンチ葦石落下状況図



第10図 5-5 トレンチ葦石落下状況図

下端の長軸約85cm、短軸約30cm、深さ20cmと小型であり小児用のものと考えられる。

4-1トレンチでは中央やや墳丘寄りに段状遺構、中央東寄りに大型の土坑1基が検出され、段状遺構の下端部で土師器の壺が出土した。段状遺構の幅は約80cm、高さは約10cm程度のものである。土坑は長さ約2.5m、幅約1.5mの隅丸方形であり、底部は二又になり深さはそれぞれ1.1mと1.2mであるが用途は不明である。

4-2トレンチでは、北側に溝状遺構、中央墳丘寄りに土坑と溝状遺構が検出された。北側の溝状遺構は東側の幅約3m、西側の幅約2m、深さ約50cmであり、埋土より須恵器、土師器片が検出された。墳丘側の溝状遺構は幅約1.4m、深さ約15cmと浅いものである。土坑は一部を掘っただけであるが幅約1m、深さ1m、長さが1m+ α である。

4-3トレンチでは、中央部西寄りに幅約2m、深さ約25cmの溝状遺構が検出され、墳丘側に土師器が出土した。

4-4トレンチにおいては、南端部に大小2本の溝状遺構が検出された。大型の溝状遺構は幅1.6m、深さ20cm、小型の溝状遺構は幅60cm、深さ6cmであり、小型のものが大型のものに切られている。

5-1トレンチでは、墳丘際に鋭角な溝状遺構の壁、中央部に幅約5m、深さ約25cmの緩やかな溝状遺構が検出された。

5-2トレンチでは、中央部に幅10m、深さ3mの大型溝状遺構が検出され、6号墳近くで土師器の壺が出土した。溝状遺構は中央部に約4mのテラス状のものがあり、その部分に小型の溝状遺構が2条見られ、さらに6号墳側が最も深くV字状になっている。遺構内部からの遺物の出土は無く、円礫が若干検出されただけである。5-1トレンチの墳丘際に見られた溝状遺構に続くものと考えられ、5号墳の前方部東側を切っているものと思われる。

5-3トレンチでは、東部に幅90cm、深さ20cmの溝状遺構と深さ20cm、幅1.5m+ α の溝状遺構が検出され、縄文時代前期の土器と石鏃が出土した。

5-4トレンチでは、周溝内に落下した葺石が検出されたが多量とは言いがたいものであった。周溝は3号墳との間にある築堤状のマウンドから緩やかな墳丘際まできている。

5-5トレンチにおいても周溝内に落下した葺石が検出されたが量的には少ないものであった。また、周溝は5-4トレンチと同様であるが急角度で前方部裾へ向かって行く事が確認された。

2) 遺物について (第11図)

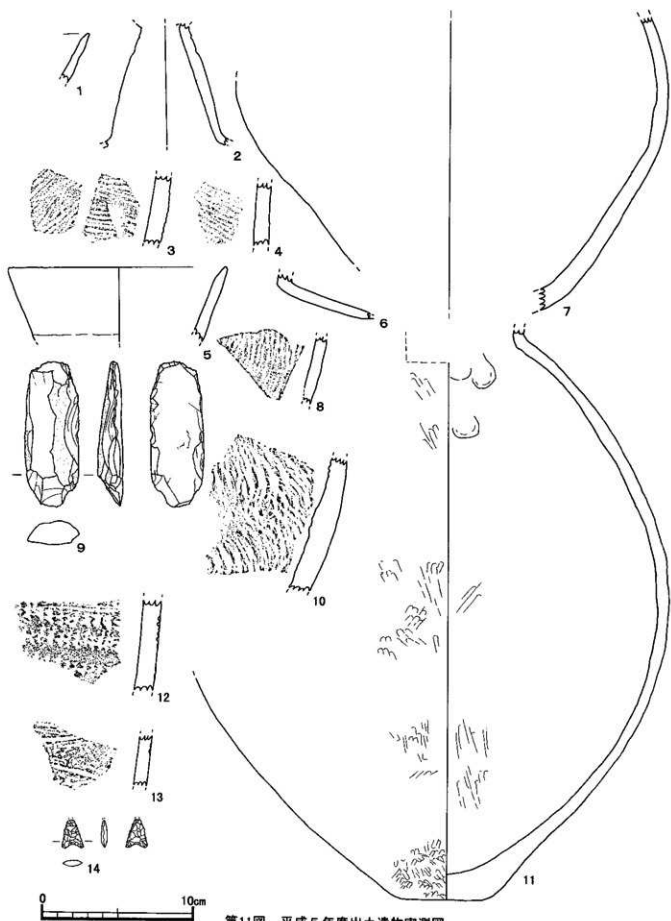
1、2は2-1トレンチ出土で、1は壺の口縁でナデによる波打ちが見られる。2は、高坏の脚部で裾の屈曲が極低位にある。

3は2-2トレンチ出土の縄文土器で両面貝殻条痕である。

4は3-2トレンチ出土の縄文土器で外面は貝殻条痕、内面はナデである。

5、6、7は4-1トレンチ出土の壺で全面ナデ調整で同一個体と思われる。

8は4-2トレンチ出土の須恵器で外面は叩きである。



第11圖 平成5年度出土遺物実測図

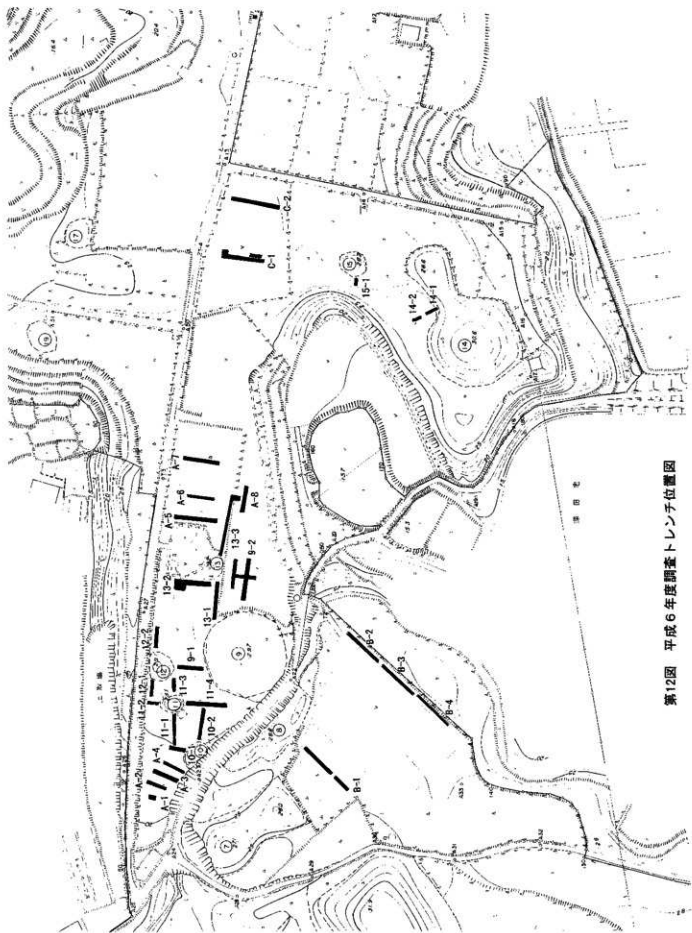
9は4-4トレンチ出土の石斧の破損品で長さ9.8cm、幅3.4cmである。

10は5-1トレンチ出土須恵器で、内面青海波、外面叩き後ナデである。

11は5-2トレンチの6号墳裾付近出土の壺で、外面はヘラ磨き、内面は下部にヘラ磨きの跡が見えるが、全面にナデている。底部の位置に比べると胴部の張りの位置、頸部の位置に大きな開きのある歪な土器である。

12、13、14は5-3トレンチ出土の縄文時代遺物で、12は貝殻腹縁による押引き、13は深めの貝殻条痕、14は先端欠損の石鏃である。

4-1トレンチと5-2トレンチ出土の大型壺は、それぞれ4号墳、6号墳への供献土器の可能性がある。



第12図 平成6年度調査トレンチ位置圖

2. 平成6年度の調査

(1) 調査の概要 (第12図)

平成6年度は、7号墳から15号墳周辺までを調査対象範囲とし、9号墳～13号墳周辺までをA区、7、8号墳の周辺をB区、15号墳東側の畑をC区、14、15号墳の周辺をD区と設定した。また、墳丘については方位による十文字のトレンチを基本とし、畑地については任意にトレンチを設定した。

A区では、9号墳の東に9-1、南に9-2トレンチ、10号墳の東に10-1、南に10-2トレンチ、11号墳の北に11-1、東に11-2、南に11-3、西に11-4の各トレンチ、12号墳の北に12-1、南に12-2トレンチ、13号墳の北に13-1、東に13-2、南に13-3トレンチを設定し、畑地には、北から順にA-1からA-8トレンチまで設定した。

B区は、畑の北側(7号墳前方部側)にB-1トレンチ、畑の南側に東からB-2～4トレンチを設定した。

C区では、北にC-1、南にC-2トレンチを設定した。

D区には、14号墳の東側くびれ部に14-1、2トレンチ、15号墳の北側に15-1トレンチを設定した。

その結果、円形周溝墓、地下式横穴墓、二段掘土壇、墓石等の遺構が検出され、須恵器、土師器、鉄鏃、鉄斧等の鉄器が出土した。

(2) 遺構と遺物 (第13図～第29図)

1) 遺構について

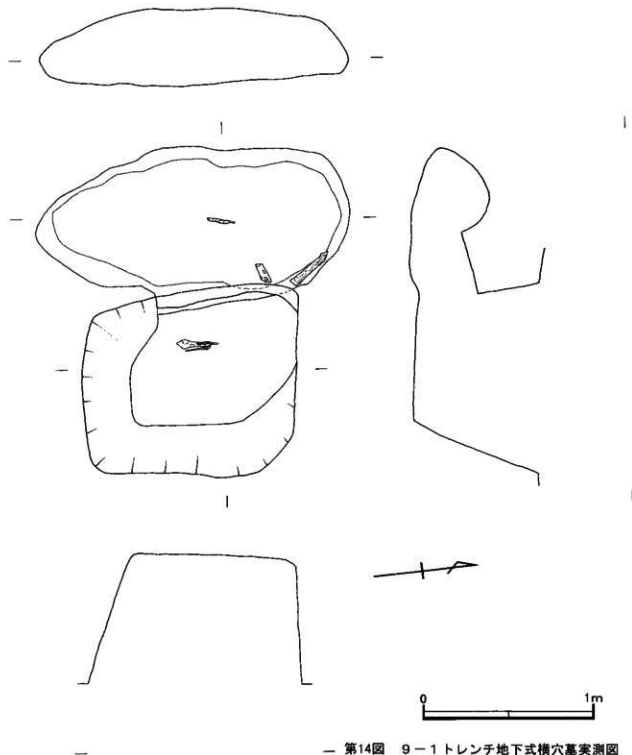
9-1トレンチでは、浅い溝状遺構と地下式横穴墓が検出された。溝状遺構はトレンチ内を東西に走るものと、南北方向のもの2本が検出されたがトレンチ中央部では確認出来なかった。溝状遺構中央部で高坏等の土師器、12号墳寄りで縄文土器片が検出された。12号墳近くに周溝状遺構が見られ、基段部の痕跡の可能性がある。

地下式横穴墓は、9号墳寄りの部分で堅壙を2本の溝状遺構に切られる形で検出された。堅壙の一部がトレンチの壁にかかり拡張出来なかったが、上端1.6×1.1m、下端0.9×0.7m(推定)となり、9号墳に向かって玄室を掘り込んでいるが、墳丘の裾までも届くものではない。羨門は口の字形で羨道となる部分は無く、1.8×0.9m、高さ45cmの楕円形でドーム状の天井を持つ玄室に直接つながる。堅壙床面近くで鉄鏃、玄室中央部に大型の刀子、右袖部に鉄斧と鉄鎌が出土した。

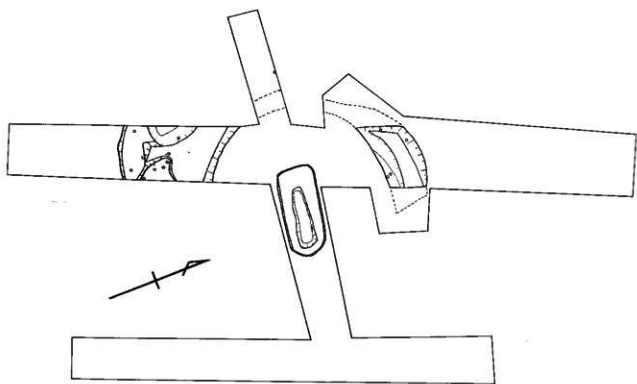
9-2トレンチは、柿の木の間を抜いて設定し、当初溝状遺構2本と土壇の端が50cm見えていたので、土壇部分を拡張した。さらに、西田文化庁調査官より円形周溝墓の可能性を指摘されたため、確認トレンチを2本(2'トレンチ)追加設定した。その結果、2トレンチの南側にある溝状遺構は2本が切りあったものでその北側の溝状遺構が周溝として西側に続くかと判断された。周溝の北側は1m拡張した段階でとぎれるものであり、東側の2'トレンチにおいては全く遺構は検出されなかった。以上のことからこの円形周溝墓は、東側に幅広のブリッジを



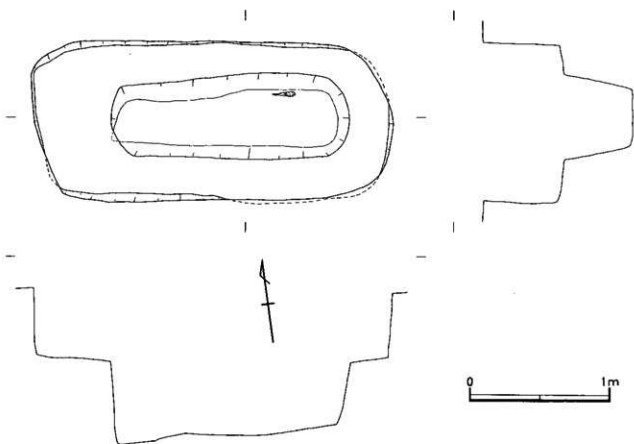
第13図 9-1トレンチ実測図



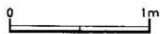
第14図 9-1トレンチ地下式横穴墓実測図

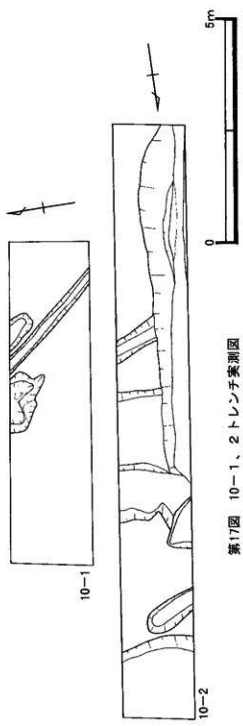


第15図 9-2トレンチ実測図

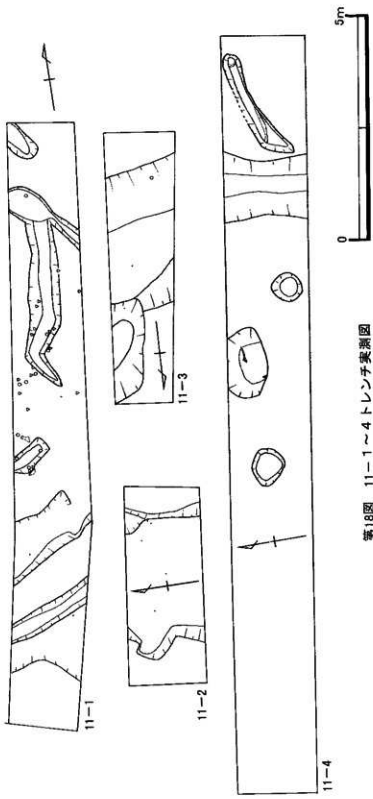


第16図 9-2トレンチ内二段掘土壕実測図

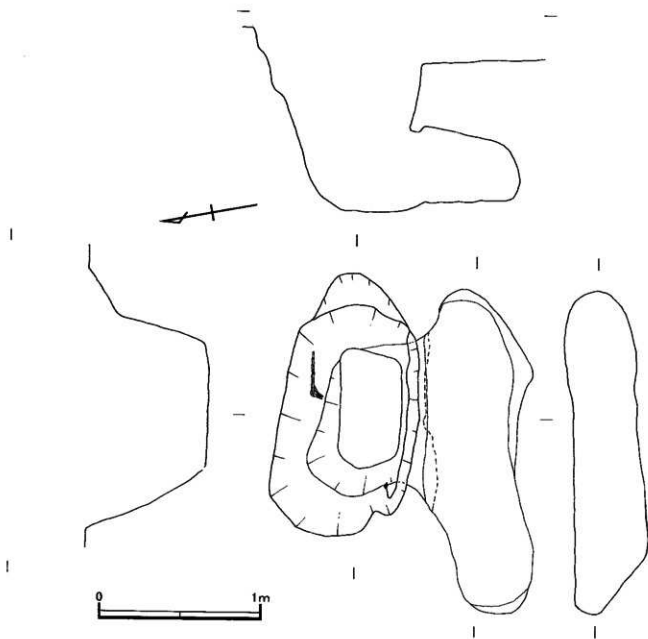




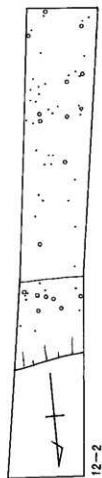
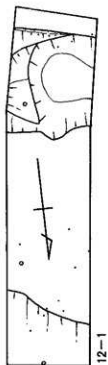
第17図 10-1、2 トレンチ発掘面図



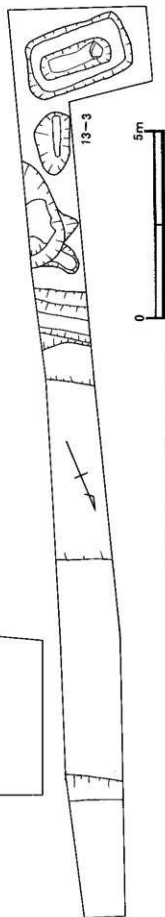
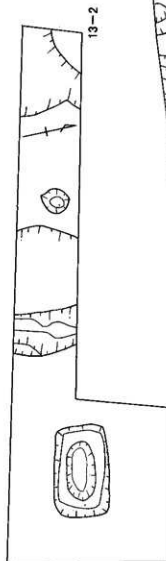
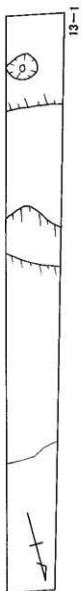
第18図 11-1~4 トレンチ発掘面図



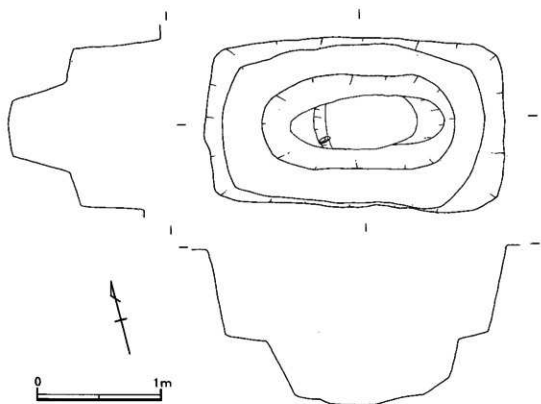
第19図 11-4 トレンチ内地下式横穴墓実測図



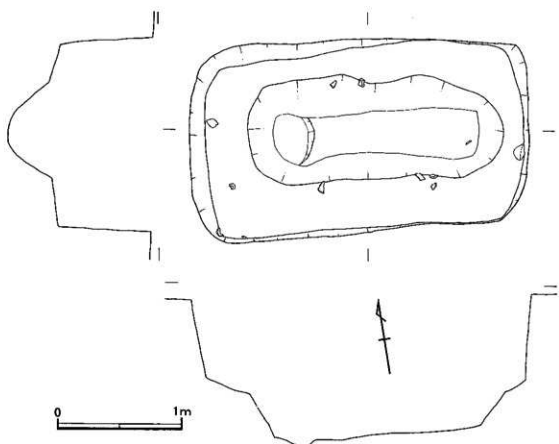
第20図 12-1、2トレンチ実測図



第21図 13-1～3トレンチ実測図



第22図 13-2 トレンチ内二段掘土壕実測図



第23図 13-3 トレンチ内二段掘土壕実測図

持つと思われる。

周溝墓の直径は約7m、周溝幅1.3mで二段掘土壌を主体部に持っている。主体部は上段2.6×1.1m、下段1.7×0.6mの隅丸長方形で上段・下段共に50cmの掘り込みである。また、下段のテラス部に2.1×0.9mの範囲で白色粘土が薄く検出された。副葬品としては、圭頭式の鉄鎌1本が出土した。また、周溝北側内部に2×0.7mの竪の掘り込みがあり、さらに南（主体部）に向かって幅60cm程度の玄室状の横穴（以下横口式土壌と呼ぶ）が構築されていたが、遺物の出土は無かった。周溝内から弥生土器、土師器等が出土した。

10-1 トレンチでは、幅30cmの溝状遺構と土壌が検出されたが遺物等の出土は無かった。

10-2 トレンチにおいては、南北に走る大型の溝状遺構と地山を段状に削った跡が検出された。段状のものは、みかん山にした際の整地の可能性が高いと思われるが、10号墳寄りにやや円弧を成すものは基段部と周溝の痕跡の可能性もある。大型の溝状遺構は半分ほどしか調査しておらず規模は不明であるが、11-4 トレンチから続き推定幅1.5mで北に行くにつれて深くなって行きトレンチ中央部で西に曲がり10号墳の南側を通り7号墳へ向かうと思われる。他の溝状遺構とは規模に大きな差が見られることから、道（墓道）の可能性もある。

11-1 トレンチは、細く浅い溝状遺構が4本と段状のものが2カ所に見られた。溝状遺構と段状のものは、みかん山にした際の整地の可能性が高いと思われるが、11号墳寄りにやや円弧を成すものは基段部整形の跡の可能性もある。トレンチ中央部で土師器、須恵器が集中して出土したが、土地改良事業の際に表土を外され、耕作のためかなり壊されていたが、土師器の高坏は地山に貼り付けて出土していることから、あまり原位置を動いていないと思われる。

11-2 トレンチでは、緩やかな段状のものが2カ所見られ、段状のものは、みかん山にした際の整地の可能性が高いと思われるが、11号墳寄りにやや円弧を成すものは基段部整形の痕跡の可能性もある。

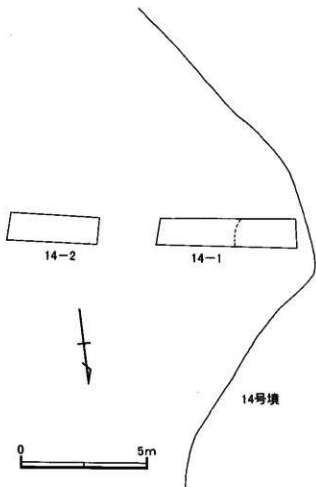
11-3 トレンチにおいては、11号墳と12号墳のほぼ中央に幅3mの溝状遺構と11号墳寄りに2×0.7m程の不明土坑が検出されたが、段状の遺構は検出されなかった。溝状遺構は11号墳と12号墳を区画するかのようには造られている。

11-4 トレンチは、10-2 トレンチへ続く溝状遺構と地下式横穴墓1基が検出された。溝状遺構は幅1mで南に向かい徐々に浅くなり、9-1 トレンチまでには消滅する。

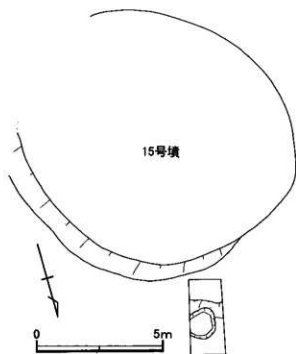
地下式横穴墓は、1.45×0.85mの竪壇、羨門はロの字形で羨道となる部分は無く、2×0.6m、高さ45cmの長楕円形で半ドーム状の玄室を有する。玄室は南向きで9号墳とややそれて玄室を掘り込んでいるが、墳丘の裾まで届くものではない。竪壇より、鉄鎌とヤリガンナが出土している。

12-1 トレンチでは、溝状遺構と不明土坑、段状の跡が検出された。溝状遺構は不明土坑に大きく切られているが、11-3 トレンチにおいて検出されたものとなつなると考えられ、12号墳の周溝となる可能性が高い。

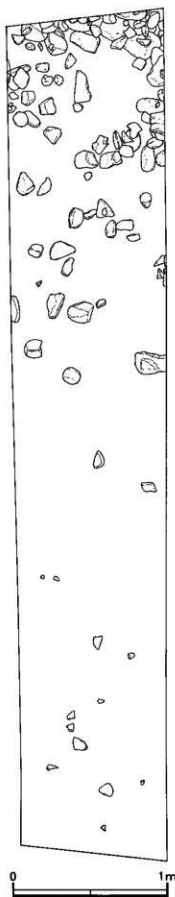
12-2 トレンチ内は、深い段となっており、整形時期は不明である。遺物としては縄文土器、土師器等が出土している。



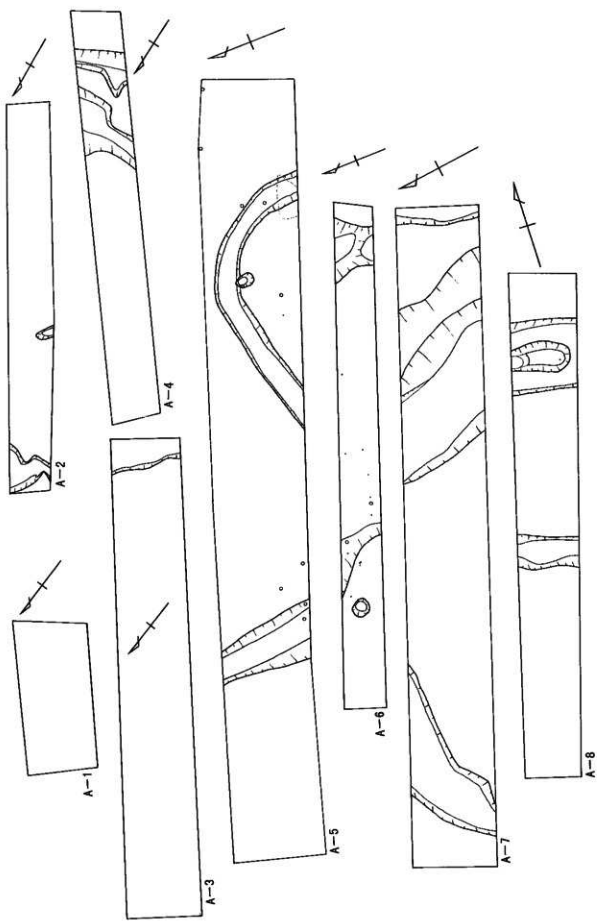
第24図 14-1、2 トレンチ実測図



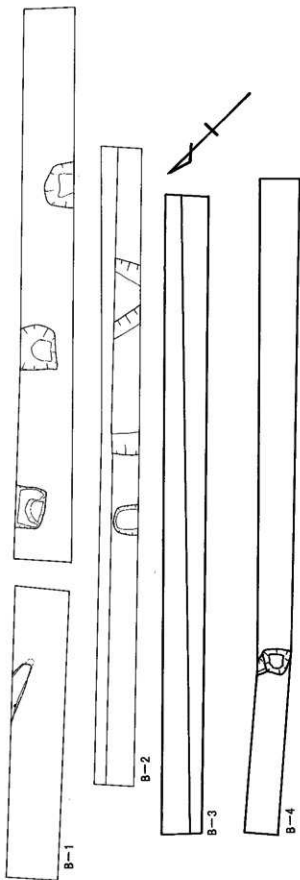
第26図 15-1 トレンチ実測図



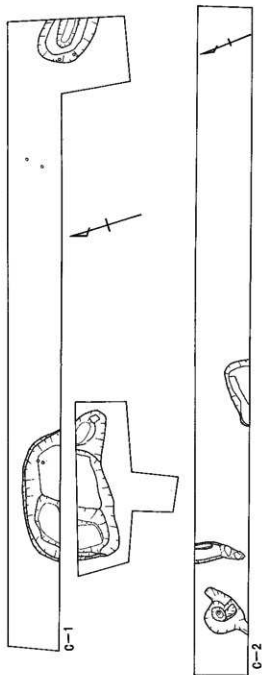
第25図 14-1 トレンチ墓石落下状況図



第27図 A-1~8トレンチ実測図



第28図 B-1~4トレンチ実測図



第29図 C-1、2トレンチ実測図

13-1 トレンチは、13号墳寄りに溝状遺構、トレンチ中央から9号墳に向かって徐々に深くなる溝状遺構とが検出された。前者は13号墳の周溝となる可能性があり、後者は12-2 トレンチの段状遺構につながる可能性がある。遺物の出土は無かった。

13-2 トレンチでは、二段掘土壌と溝状遺構が検出された。二段掘土壌は上段2.4×1.4m・深さ70cm、下段1.6×0.7m・深さ50cm隅丸の長方形である。下段西側で円礫が1点出土している。溝状遺構は二段掘土壌の近くに幅1mのものがあるが、曲がりの方向が周溝とは言えないものであった。また、13号墳寄りの溝状遺構も周溝とは言い難いものである。

13-3 トレンチ内は、北から13号墳寄りに溝状遺構、中央部に深い溝状遺構、大型の土坑、小型の土坑、二段掘土壌が検出された。13号墳寄りの溝状遺構は周溝となる可能性を残している。他の溝状遺構、土坑については、遺物の出土も無く性格は不明である。二段掘土壌は、上段2.6×1.5m・深さ70cmの隅丸長方形で、下段2.1×0.8m・深さ35cmの長楕円形であり、床面は西端を掘り下げている。東側床面で鉄器1本、テラスで土器片と礫が出土している。

A-1、2、3、4 トレンチにおいては、特に遺構、遺物は検出されなかった。

A-5 トレンチでは、検出された2本の溝状遺構のうち東側のものは、幅50cmで底部を検出しただけであるが、周溝的な弧を描いており、器台等が出土したことが注目される。

A-6 トレンチは、性格不明な溝状遺構と段が検出されただけである。

A-7 トレンチにおいても、幅2mと幅1.2mの溝状遺構が検出されたが、その性格は不明である。

A-8 トレンチでは、溝状遺構と二段掘土壌が検出され、溝状遺構は、幅80cmのものであった。二段掘土壌については拡張して完掘していないが、上段幅1.6m、下段幅0.6mを計り、床面は西側に段を持っている。円礫が1点出土している。

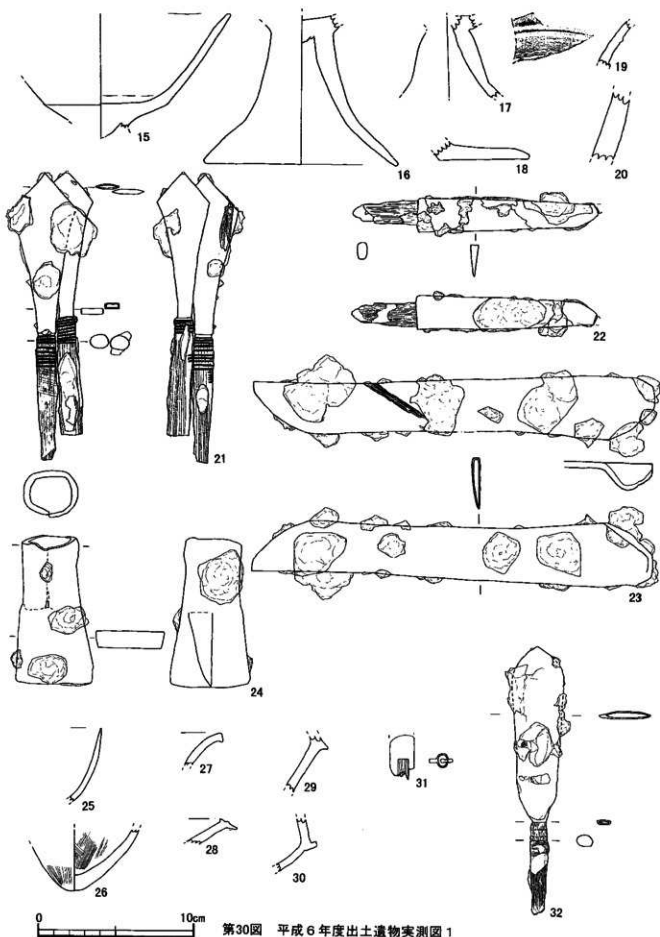
B-1 トレンチにおいては、3基の地下式横穴墓の堅壙と土壌1基（地下式横穴墓の玄室部の可能性もある。）を検出し、7号墳と逆の南向きに玄室を持つことを確認した。但し、地下式横穴墓の玄室調査は行わず、整備計画の一環とすることとした。また、本トレンチ周辺は約2mの盛土を土地改良事業の際に行っており、7号墳前上方の形状は現況とは異なっていることが判明した。土壌から鉄斧が出土した。

B-2 トレンチは、トレンチャーにより東西方向に長く切り取られていたが、東側に幅3.8mの溝状遺構と段状の整形が見られた。さらに、溝状遺構から東側のセクションが黒色土とアカホヤの互層を成していることから、消滅したと考えられている旧15号墳の可能性もある。

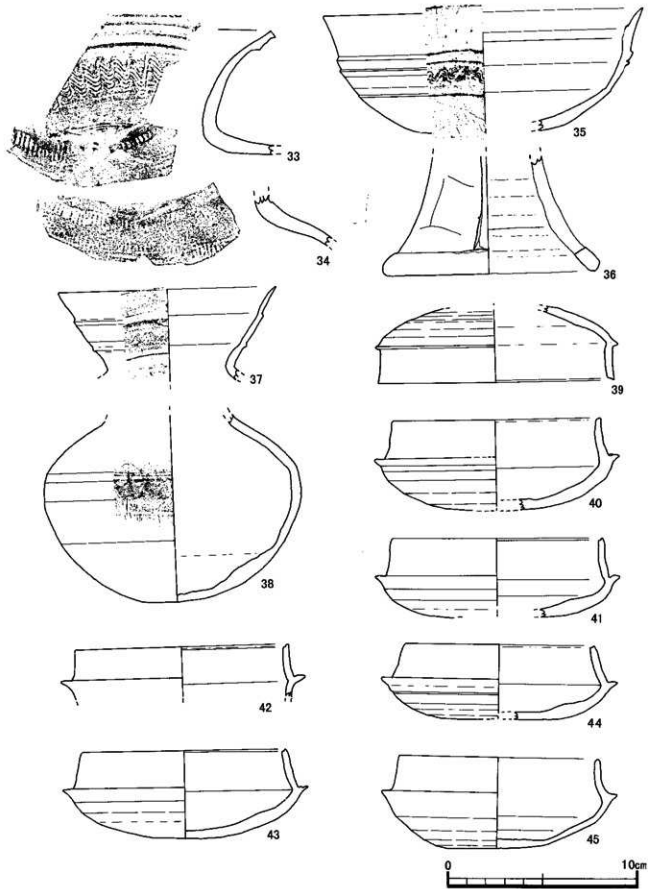
B-3 トレンチ、B-4 トレンチからは、遺構等の検出は無かった。

C-1 トレンチでは、東端に二段掘土壌が、西側に堅穴状遺構が検出された。二段掘土壌は拡張・完掘していないが、上段幅1.3m、下段幅0.4mとやや小振りである。堅穴状遺構は、平面が2.5×3.5mの隅丸長方形で、床面は中央より西側が1段下がっている。しかし、ピット等は検出されず、その性格は不明である。

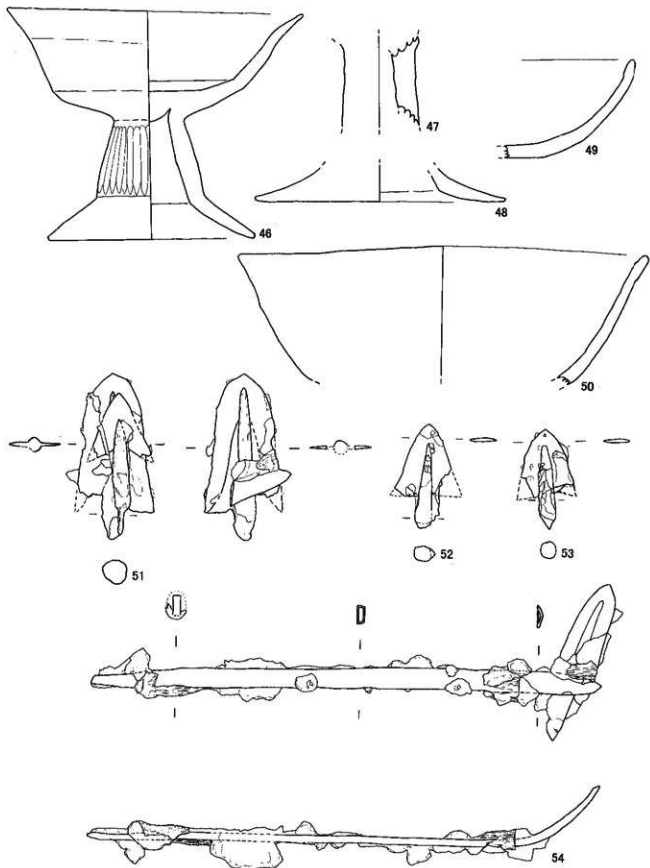
C-2 トレンチは、中央部に地下式横穴墓の堅壙部、西側の溝状遺構から横口式土壌、土坑が検出されたが、土坑以外は完掘していないため形状は不明である。土坑は、直径1mの浅い



第30図 平成6年度出土遺物実測図1



第31圖 平成6年度出土遺物実測図2



第32図 平成6年度出土遺物実測図3

もので、その中央部から小型の壺が出土したことから、横口式土壇の供献遺構の可能性がある。

14-1 トレンチでは、落下した葺石が検出されたが、溝状遺構等は検出されなかった。

14-2 トレンチは、縄文土器片と礫が若干出土しただけである。

15-1 トレンチは、墳丘寄りに段状遺構が検出され、基段部整形跡の可能性はある。

2) 遺物について (第30図～第35図)

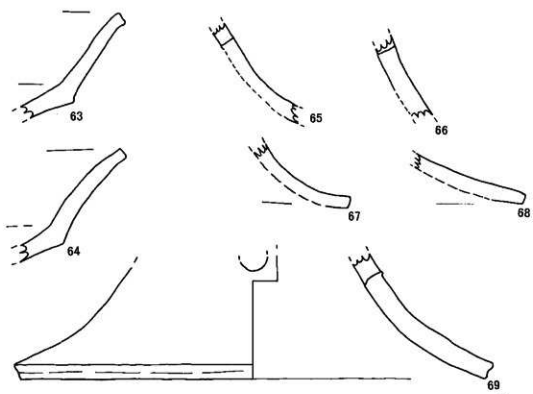
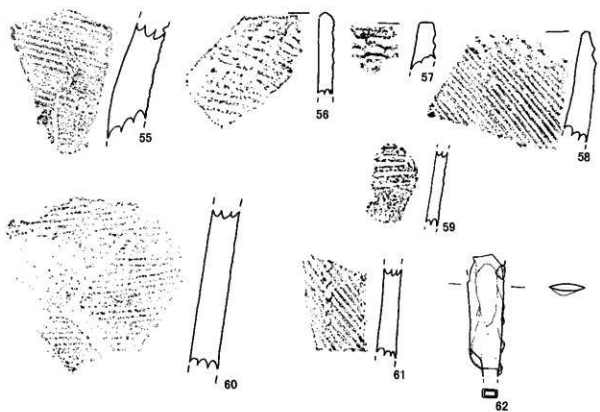
15～20は9-1 トレンチ出土遺物である。15は高坏の坏部で丁寧になで、一部に丹塗りの痕跡があり、脚近くに段を有する。16は高坏の脚で緩やかに裾が開くものでなで調整である。17も高坏の脚でエンタシス状にふくらむものである。18は高坏の裾部でほぼ水平に開く。19は須恵器の壺の頸部で波状文が施されている。20は縄文土器で貝殻条痕である。

21～24は9-1 トレンチ内の地下式横穴墓出土の鉄器である。21は大型の圭頭鎌2本で共に矢柄への装着部が残っている。最大幅4cmと3.2cmで鎌身の長さは10.5cmと9.5cmである。22は大きめの刀子で切っ先を欠損する。刃渡り12cm、茎4cm、中央部の身幅2cm、棟幅0.5cm、重量44.2gである。23は全長26cm、刃幅3cm、重量195.9gの直刃の大型の鎌で、柄の装着部は折り曲げ式で鈍角となる。24は全長9.6cm、刃幅5.1cm、重量231.5gの有袋鉄斧で袋部折り曲げによる段が若干残る。

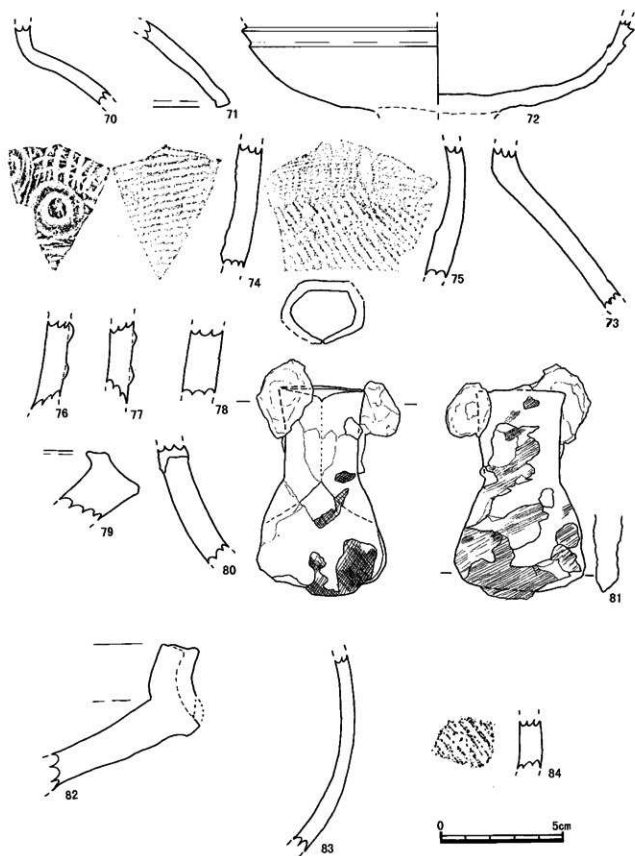
25～31は9-2 トレンチ出土遺物である。25、26は小型の鉢で細かなハケを施し、焼成も良い。27、28は壺の口縁部、29は二重口縁壺の一部、30は貼付け突帯のある胴部である。31は鉄鎌の茎部で幅1.5cmである。

32は円形周溝墓主体部出土の柳葉式鉄鎌である。鎌身の長さ11.3cm、最大幅3.4cm、重量44.2gと大型で、茎の断面は長方形で矢柄への装着部を残す。

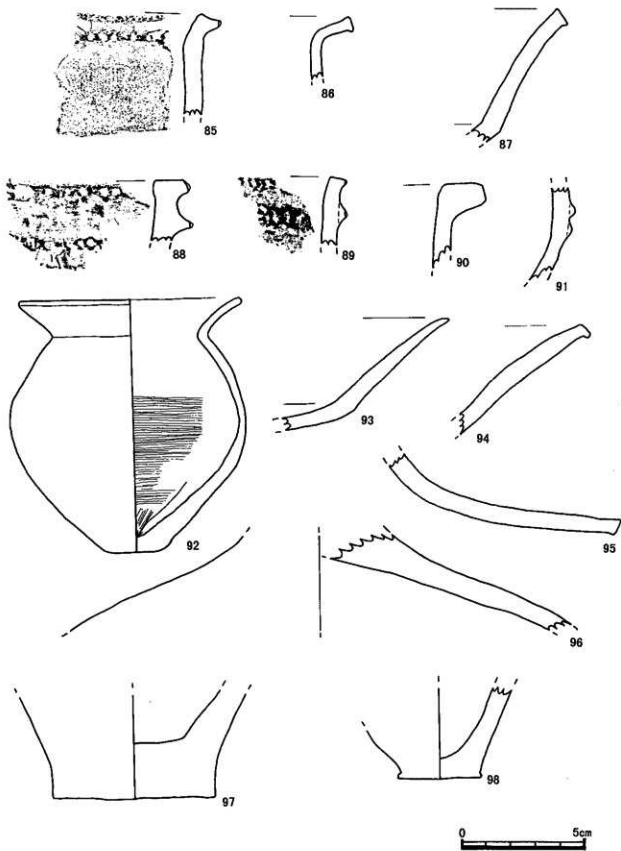
33～50は11-1 トレンチ出土土器で、33～45は須恵器、46～50は土師器である。33は甕で肩の張る胴部に外反する口縁部を持ち、口縁部端を平坦にし、やや鋭さに欠ける突線を持ち、突線下に大きめの波状文を施している。34は33と同様に胴部は叩きの跡をなで消している。35は高坏の坏部で推定口径17cmの無蓋式である。口縁部は外面が直行的に外開きに立上り、内面は肥厚し、体部との境に段を有する。体部は明瞭な段を持つ突線を2本入れ、その下に波状文、さらにその下に突線を1本入れている。36は35と同一個体と思われる脚部で、エの字状のヘラ記号が刻まれている。緩やかに広がり、台形状の透かしが坏との接合部から裾部まで長く入るもので、裾を丸く仕上げています。37は壺の口縁部で直行的に外開きに立上り、明瞭な段を持つ突線の間に波状文を施す。38は壺の胴部で中央やや上が最大径となり波状文を施す。39は坏蓋で天井部の稜は明瞭で、体部との境が段状となり長く外に開く体部の端に段を有する。40～45は坏身である。口縁径11cm前後で蓋受けの立上りは高くやや内傾し、45を除き端部に段を有する。46は高坏で坏部は緩やかな屈曲部を持ち口縁部はやや外反する。脚部は短く、エンタシス状で、裾部は稜を持ち外膨らみである。47は高坏の脚部で直線的なものである。48は高坏の裾部で水平的に開くものである。49は浅めの鉢で口縁端をやや肥厚させる。50は鉢で緩やかに外開きとなる。



第33圖 平成6年度出土遺物実測図4



第34图 平成6年度出土遺物実測図5



第35圖 平成6年度出土遺物実測圖6

51～54は11-4 トレンチ内地下式横穴墓出土の鉄器である。51は全長8.9cm、幅3.9cmの腸状長三角形式鎌と全長7.5cm、幅3.1cmの三角形式鎌である。52は全長5.5cm、幅3.4cm、重量7.9gの三角形式鎌である。53は全長5.4cm、幅3.1cm、重量6.9gの三角形式鎌である。54はヤリガンナで刃部と茎部の幅は同じ。柳葉状で、現長27.2cm、幅1.7cmである。

55は12-1 トレンチ出土の縄文土器で内面ナデ、外面貝殻条痕である。

56～60は12-2 トレンチ出土の縄文土器である。56、57、58は内面ナデ、外面貝殻条痕で口縁端に貝殻腹縁の押し引きを施文する。59、60は胴部で内面ナデ、外面貝殻条痕である。

61、62は13-3 トレンチ内の遺物である。61は内面ナデ、外面貝殻条痕の後縦に貝殻腹縁文を施す。62は鉄鎌の欠損品と思われる、現長5.1cm、幅1.5cmである。

63～69はA-5 トレンチ出土土器である。63、64は高坏の坏部で屈曲部に明瞭な段を有し、外反する体部で口縁端を平坦にする。65～68は高坏脚部で、円形の穿孔を有し裾に平坦部を持つ。69は器台の脚で円形の穿孔を有し、端部に沈線状のものが認められる。

70～80はB-1 トレンチ出土土器である。70～75は須恵器で、70は壺の頸部である。71は坏蓋で身受けが形骸化している。72は高坏坏部で明瞭な段を持つ突線を2本入れている。73は72と同一個体と思われる脚部である。74、75は胴部片である。76、77は貼付け突帯の壺の胴部であろう。78は丹塗りの跡が見える。79は壺の口縁と思われる。80は器台脚部で円形の透かしをもつ。

81はB-1 トレンチ内土壌出土の鉄斧で、全長8cm、刃端5.2cm、重量149.6gの有袋鉄斧で袋部折り曲げにより撥状を呈する。

82、83はB-2 トレンチ出土土器で、82は大型の二重口縁壺の口縁部で高さ5mm、幅5mmの突帯を縦に2条貼付けている。83は壺の胴部である。

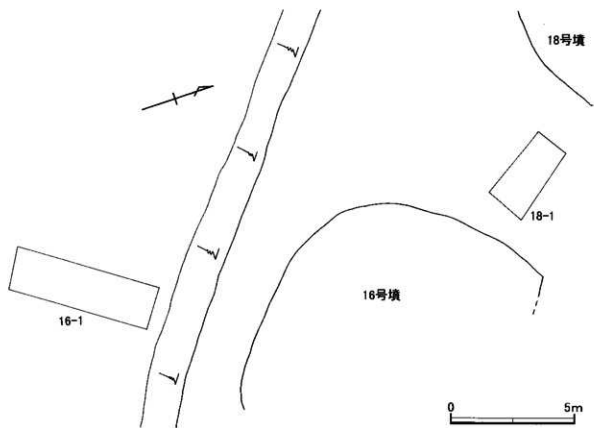
84はB-3 トレンチ出土の縄文土器で内面ナデ、外面貝殻条痕である。

85～87はC-1 トレンチ出土土器である。85は甕で口縁部に刻み目突帯を有する。86はくの字外反する口縁部である。87は屈曲部に段を有する高坏の坏部である。

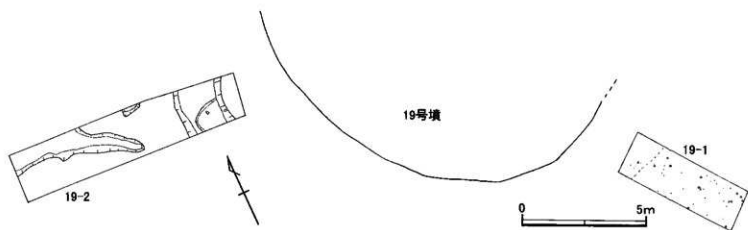
88～98はC-2 トレンチ出土土器である。88、89は口唇部と口縁下の突帯に刻み目を施す甕である。90は所謂逆L字形口縁である。91は2条の鈍い三角突帯を巡らしている。92は小型の壺で、くの字に外反する口縁部、最大径は胴中位にあり平底である。外面から内面の胴部3分の1まではナデであり、残りは横方向のハケを施している。93は高坏の坏部で明瞭な段を有し直線的に開く。94、95は器台である。96は大きくハの字に開く脚部と思われる。97は分厚い底部でやや直立している。98は小型甕の底部で握がつまみ出されている。



第36図 平成7年度調査トレンチ位置図



第37図 16-1、18-1 トレンチ実測図



第38図 19-1、2 トレンチ実測図

3. 平成7年度の調査

(1) 調査の概要 (第36図)

平成7年度は、16号墳から19号墳の周囲をE区、21号墳から23号墳の周辺をF区、市道井尻柏原線により分断された南側の畑をG区と設定した。

E区では、16号墳の南に16-1トレンチ、16号墳と18号墳の間に18-1トレンチ、19号墳の東に19-1トレンチ、西に19-2トレンチ、19号墳西側の畑にE-1～5トレンチを設定した。

F区には、22号墳の前方部西側に22-1トレンチを設定し、21号墳の北側の雑木林の中にF-1トレンチを設定したが、他の部分については、フェニックスが密植してあるうえかなり成長しているために調査は行っていない。

G区では、畑の北側にG-Aトレンチ、中央部にG-Bトレンチ、畑の西側斜面の畑に北から順にG-C、D、E、F、Gトレンチを設定した。

その結果、E区では円形周溝墓・二段掘土壙等、F区では、葺石・地山整形跡等、G区では、二段掘土壙・住居跡・V字溝等が検出された。

(2) 遺構と遺物

1) 遺構について (第37図～第59図)

16-1、18-1トレンチは共に削平されており遺構は検出されていない。

19-1トレンチも削平されており遺構は検出されず、攪乱状態であった。

19-2トレンチでは、墳丘寄りに周溝状遺構と緩やかな弧を描く溝状遺構が検出された。墳丘寄りのものは幅2mで基段部整形跡を有している。

E-1トレンチでは、二段掘土壙と溝状遺構が検出された。二段掘土壙は上段2×1m・深さ50cm、下段1.4×0.5m・深さ20cmである。西側テラス下より磨製石斧が出土した。溝状遺構は二段掘土壙の北側2mの所を東西に走り、幅1.5mで一面に器台や壺の破片が出土した。この両者の関係は、特定出来なかった。

E-2トレンチは、当初溝状遺構の端が2ヵ所60cm程見えていただけであったが、両端が薄く続いていたため円形周溝墓の可能性が高いと判断し拡張調査したものである。

円形周溝墓は、直径6.5m、周溝の最大幅1m、深さ60cmで二段掘土壙を主体部に持つ。周溝は南側が最も広くかつ深く、西側が急に浅くなり痕跡化し、北側は幅50cm深さ10cmほどである。東側は他の2本の浅い溝状遺構と切り合っている上に、周溝の壁を切る形で横口式土壙が掘り込まれている。主体部は、上段2×1.2m・深さ70cm、下段1.6×0.6m・深さ30～40cmで中央より西側に段を持つ。東側テラスより円礫が出土した。

横口式土壙は2×0.6m・深さ50cmの竅穴を掘り、幅20cmのテラスを作った後に2×0.5m・高さ50cmの玄室状の横穴を掘り込んでいる。

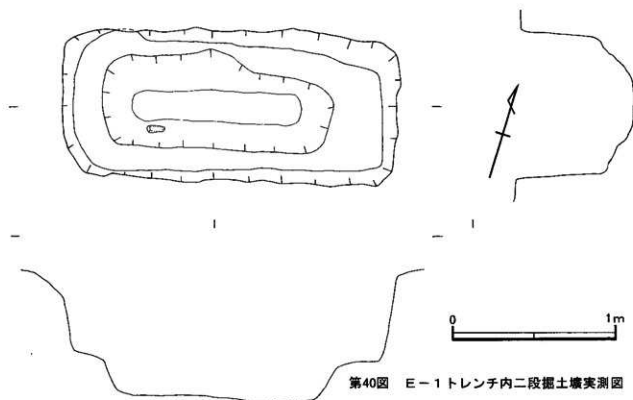
溝状遺構の切り合い部から小型土器が出土しているがどの遺構に伴うものかは判然としない。

E-3トレンチでは、アカホヤ面での遺構は検出されなかった。

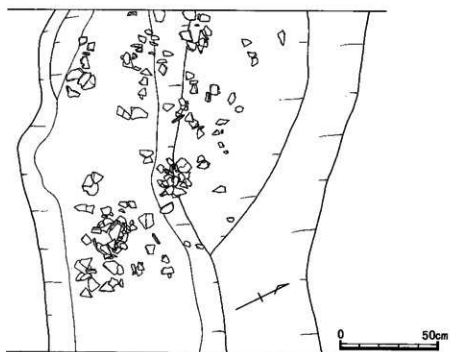
E-4トレンチにはアカホヤは残っておらず、直接縄文時代早期の包含層となった。溝状遺構の一部が東端に検出され、礫が多くはまっていた。



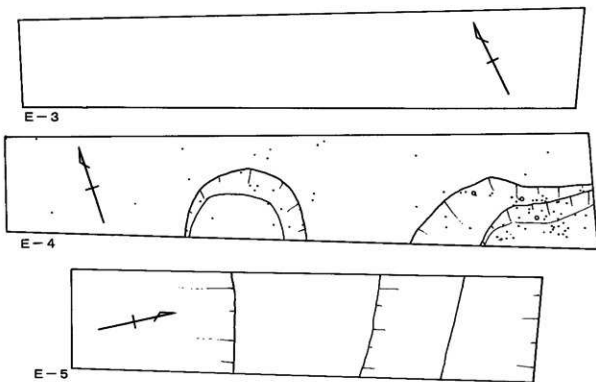
第39図 E-1トレンチ実測図



第40図 E-1トレンチ内二段掘土壌実測図

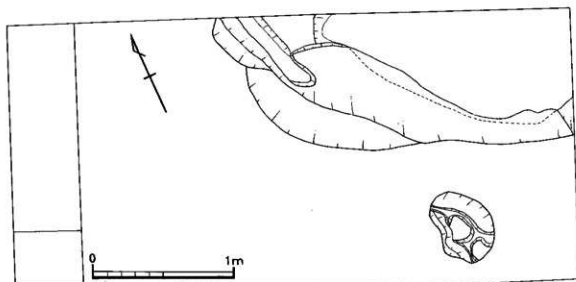


第41図 E-1トレンチ内溝状遺構実測図

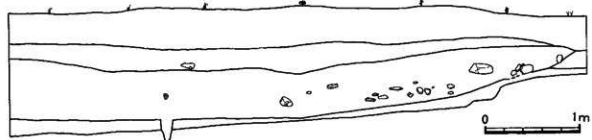


第44図 E-3～5トレンチ実測図

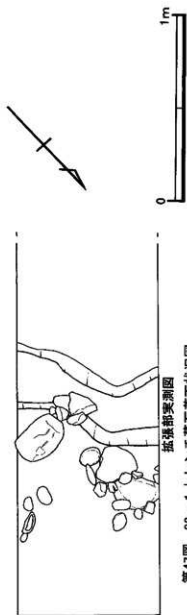
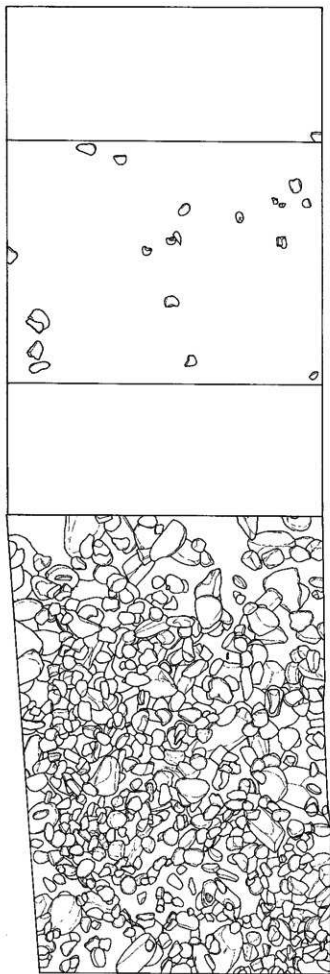
0 2m



第45図 F-1トレンチ実測図



第46図 22-1トレンチ北壁セクション実測図



第47圖 22-1トレンチ裏石層下状況図
 藍嶺部実測図

E-5 トレンチは全体が斜面と成っており、特に中央部から南側は黒色土の埋土で急激な谷状の落ちこみになり、現地表より3.4m下がっているが底面は出ていない。

F-1 トレンチでは、黒色土の落ちこみが見られたが性格は不明である。

22-1 トレンチは、当初葺石の落下状態を検出し、現地表より1.3m下がった面まで地山整形したことを確認して調査を止めていた。しかし、西田文化庁調査官より、一定の幅で落下した葺石を外し根石や基段の有無を確認するように指導を受け、墳丘側に80cm拡張し70cm幅で葺石を外すこととした。

その結果、墳丘側トレンチの壁から約1mの平坦面に続いて幅40cm高さ20cmの段を造った後を緩やかな傾斜に地山を整形していることが判明したが、段の部分が調査部で2段となっているのが、原形か木や竹の根の入り込みかは、不明である。また、段の部分でセクションが変化した新たな層が立上ることから、段の端に残した大きめの石を根石と推定したが、柳沢宮崎大学助教授から「根石は、さらに墳丘寄りにあり、かなり密に葺石が残っているのではないか。」との指摘を頂いた。葺石の下から壺形埴輪片が出土している。

22号墳前方部の端にある瘤状の盛り上がりについては、市道で切られている壁面から、黒色土の上にシラスが載っていることが観察された。また、本トレンチのセクションでは地山の上は黒色土、火山粒混じりの黒色土、シラス混じり腐葉土であり、南西角に薄くシラス層が腐葉土の上に載っていることが確認されたことから、瘤状の盛り上がりは道路開削時の残土と判断した。

G-A トレンチからは、土壇4基（1～4号）と土坑1基（1号）、壺が検出された。

1号土壇は、平面1.5×0.3m・深さ55cmを計り、床面は平らである。

2号土壇は、トレンチャーにより寸断されているが、平面2.1×0.7m・深さ50cmを計ることができ、床面は舟底状である。二段掘土壇の可能性もある。

3号土壇も、トレンチャーにより寸断されており、平面1.6×0.3m・深さ40cmを計ることができ、床面は平らである。1号土壇と同型と思われる。

4号土壇は二段掘土壇であり、上段2.1×0.8m・深さ60cm、下段1.7×0.6m・深さ30cmである。

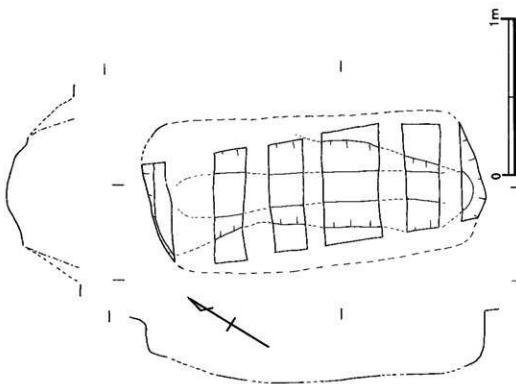
1号土坑はトレンチの壁にかかっているため全体は不明であり、2mの1辺が確認されただけで、遺物の出土も無かった。

G-B トレンチは、遺構面が浅く、トレンチャーや耕耘機の齒の跡が深く入ったため地山の残っている部分が少ないうえ、住居、土壇、ピット等が切り合っていた。そこで、土器の出土が多く、壁と思われる段を検出した部分を住居跡とした。その結果、竪穴住居跡4軒（1～4号）、土坑5基（2～6号）、土壇9基（5～13号）を検出した。

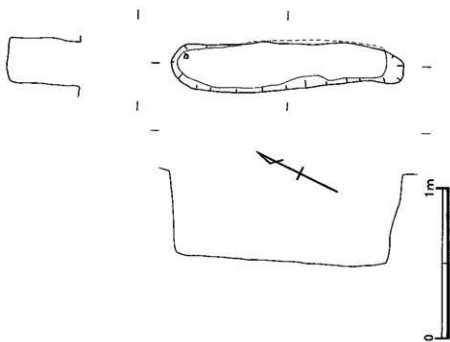
1号住居跡は、トレンチ西側に広がる1辺の長さ8mの方形の竪穴住居である。柱穴と思われるピットが3列入り、複数近接することから建替えの可能性が高い。さらに、柱状の炭が点々と検出されたことから、火事により放棄されたと思われる。弥生土器、鉄片、石砲丁、紡錘車が出土している。



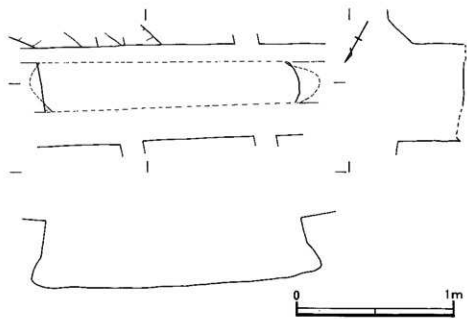
第48図 G-Aトレンチ実測図



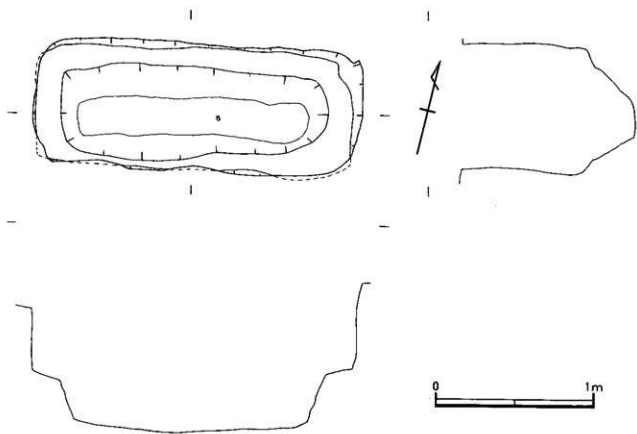
第49図 G区2号土坑実測図



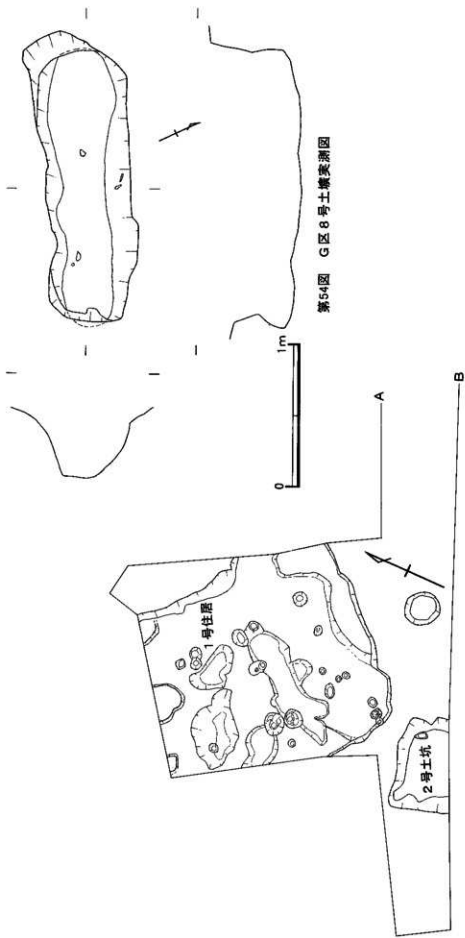
第50図 G区1号土坑実測図



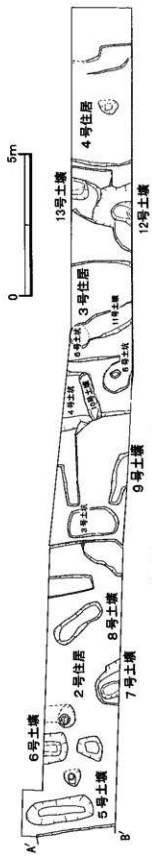
第51图 G区3号土壤实测图



第52图 G区4号土壤实测图



第54図 G区8号土坑発掘図



第53図 G-1号土坑発掘図

2号住居跡は切り合い等を含め幅10mあり、ピットは西側に偏って検出され、住居に伴うものというより、掘立柱倉庫の可能性が高い。弥生土器、磨製石鏃が出土している。

3号住居跡は、1辺5.5mの竪穴式住居であるがピットは検出出来なかった。弥生土器、石庖丁が出土している。

4号住居跡は、1辺4.3mの竪穴式住居であり、ピットは中央部に1基検出された。弥生土器、石庖丁、土製勾玉が出土している。

2号土坑は1辺3.3mの方形で、深さ20cmの緩やかな壁をしている。北東隅にピットが検出されたが、遺物等の出土は無かった。

3号土坑は2×1mの楕円形で深さ10cm、弥生土器を出土している。

4号土坑は1辺2mで深さ15cm、南側の壁を10号土坑に切られている。

5号土坑は1.2×0.9mの楕円形で深さ10cm、中央にピットを持っている。

6号土坑は直径90cmの円形で深さ35cmを計り、11号土坑と切り合っている。弥生土器の壺が出土しており、貯蔵穴と思われる。

5号土坑はトレンチャーにより寸断されているが、2.3×0.8mの長楕円形で深さ20cmの舟底状の床面をしている。

6号土坑もトレンチャーにより寸断されており推定しがたいが、幅1m・深さ30cmの素掘りであったと思われる。

7号土坑は二段掘土坑であり、上段0.8×1m・深さ36cm、下段0.6×0.5m・深さ20cmである。

8号土坑は1.9×0.6m・深さ60cmの長楕円形で小口部はオーバーハングになっている。壁は緩やかな弧をなしており、圭頭式の鉄鏃が出土している。

9号土坑は1.7×0.4m・深さ20cmの長楕円形でトレンチャーにより寸断されているため原形は不明だが、3号土坑に近いと思われる。

10号土坑は1.7×0.4m・深さ30cmの長楕円形で西側を4号土坑と切り合っている。

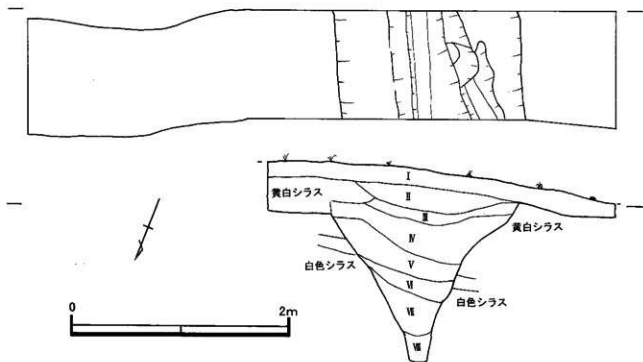
11号土坑は1.5×0.8m・深さ50cmで、西壁を6号土坑と切り合っている。床面から鉄器が出土している。

12、13号土坑は、幅2mの溝状遺構と切り合ったものと思われる。12号は幅70cm・深さ20cm、13号は幅70cm・深さ30cmである。しかし、幅2mの椀状を呈する互いの掘方同士が切り合っている可能性もある。

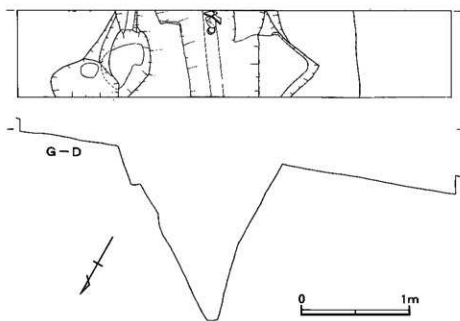
G-C～G-Tレンチは、台地西側の土取り後の壁面にV字溝を検出したため、V字溝の残存状態確認のレンチである。基本土層はⅠ表土、Ⅱ黒色土（土器包含層）、Ⅲ黄褐色シラス混土、Ⅳ暗褐色シラス混土、Ⅴ黄褐色と黄白色シラス混土、Ⅵ淡黒褐色シラス混土、Ⅶ茶褐色と黄白色シラス混土、Ⅷ淡黄褐色シラス混土である。

G-Cレンチでは、上幅2m、下幅25cm、深さ1.8mを計る。底から30cmの所（Ⅶ層）で丹塗りの土器片が出土している。

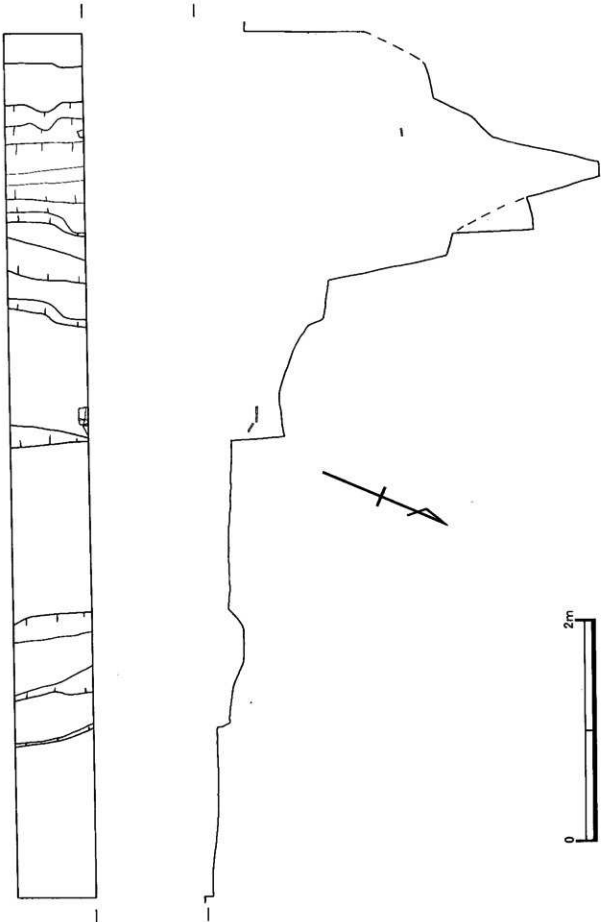
G-Dレンチでは、上幅1.5m、下幅10cm、深さ1.6mを計る。底から25cmの所（Ⅶ層）で



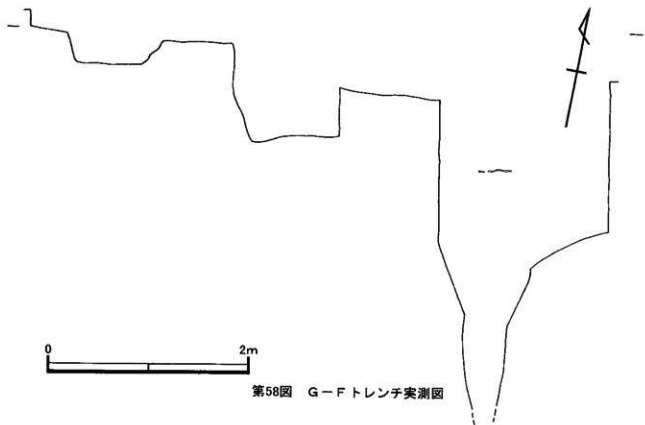
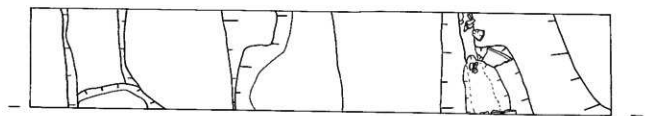
第55図 G-Cトレンチ実測図



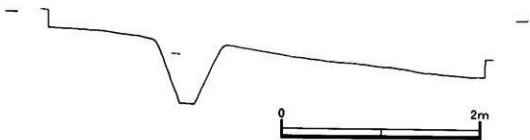
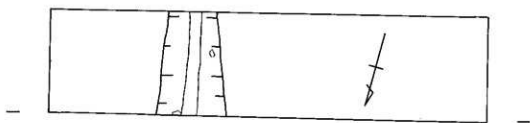
第56図 G-Dトレンチ実測図



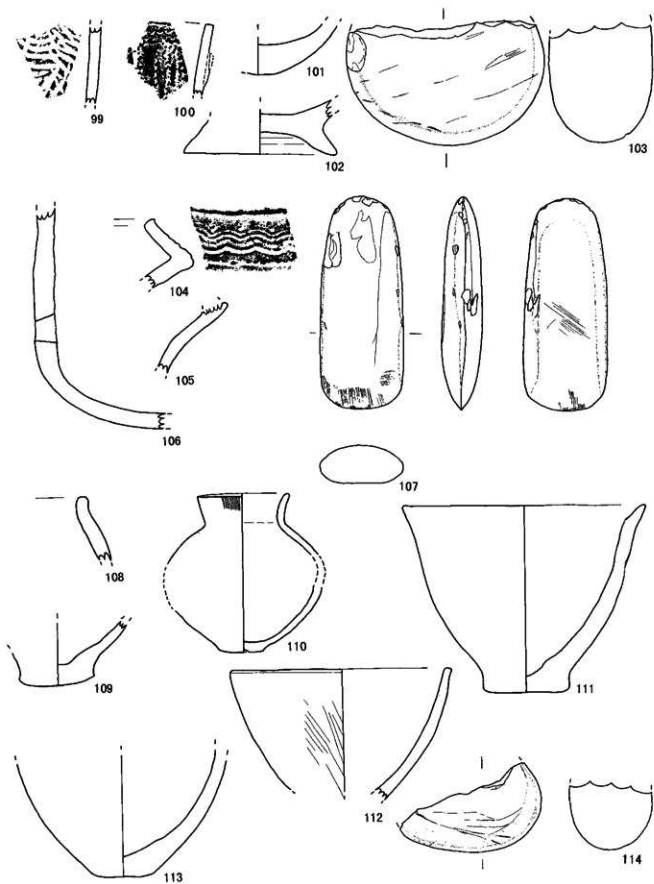
第57圖 G-E-T-Lenon子葉湖區



第58図 G-Fトレンチ実測図



第59図 G-Gトレンチ実測図



第60图 平成7年度出土物実測図1



壺の頸部、甕の底部、礫が出土している。

G-Eトレンチでは、V字溝の東側に高さ45cm、幅1.5mのテラスが検出され、テラスの端から西側シラス面までの上幅1.5m、下幅14cm、深さ2m（現地表まで3.2m）を計る。テラスから西側シラス面までの埋土は黒色土であり、弥生時代の土器が大量に填まっていた。また、東側に幅1mの浅い溝状遺構が検出された。

G-Fトレンチは、中央部にベルトを残したため確かな形状は掴んでいないが、G-Eトレンチと同型と思われる。V字溝の東側に高さ1m、幅1.3m程度のテラスがあり、テラスの端から西側シラス面までの上幅2m、下幅25cm、深さ2.5m（現地表まで3.7m）を計る。テラスから西側シラス面までの埋土は黒色土であり、弥生時代の土器が大量に填まっていることも同様である。さらに溝下部の屈曲部より甕形土器の口縁部等が出土している。また、東側に幅1mの浅い溝状遺構が検出されたことも同じである。

G-Gトレンチでは、上幅0.7m、下幅16cm、深さ0.6mを計るのみである。数点土器片が出土した。

2) 遺物について（第60図～第67図）

99は18-1トレンチ出土の須恵器で内面青海波、外面ナデである。

100～103は19-1トレンチ出土遺物で、100は貝殻腹縁文に楔形突帯を持つ縄文土器、101は壺の底部、102は太く短い脚を持つ台付鉢、103は半分を欠損する磨石である。

104～106はE-1トレンチの溝状遺構出土土器である。104、105は同一個体の二重口縁壺で胴部片も見られる。106は器台で円形透かしを有し、壺とセットであろう。

107はE-1トレンチ内二段掘土壇出土の磨製石斧で、全長11.4cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重量160gである。

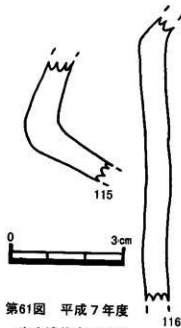
108～113はE-2トレンチの溝状遺構出土土器で全て小型土器で、円形周溝墓への供献土器の可能性がある。108、109は短頸壺で焼成はやや甘い。110は外面研磨で茶褐色の精製品である。111～113は甕、鉢で、黄白色で焼成はやや甘い。

114は円形周溝墓主体部出土の磨石で2/3を欠損する。

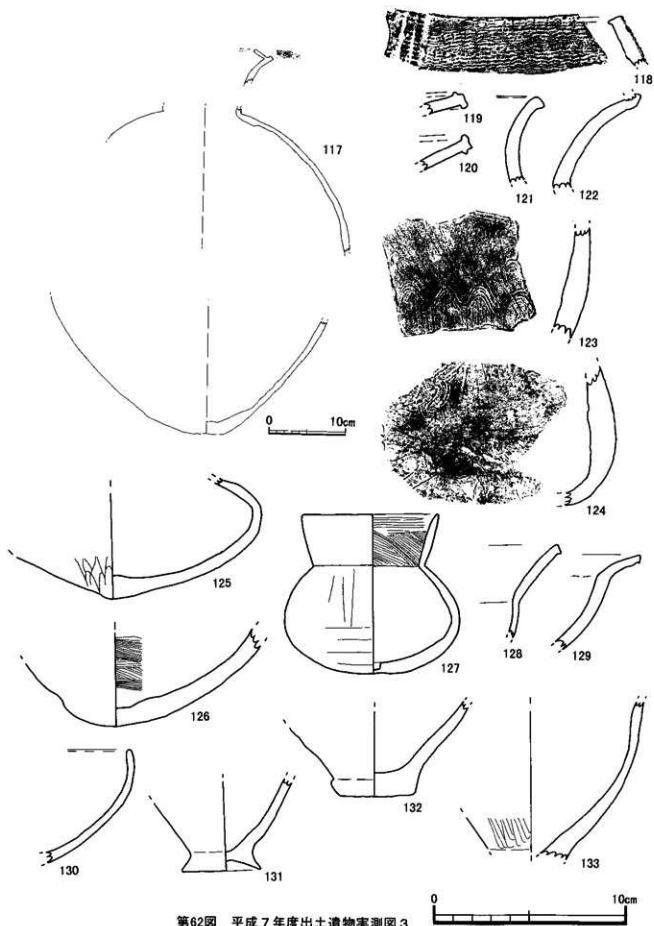
115、116は22-1トレンチ出土の壺形埴輪である。115の調整は外面がハケ後ナデで、内面は胴部がハケ、頸部はハケ後ナデである。外面から内面頸部まで全面に丹が塗られている。116は別個体と思われる頸部片で、調整はナデであり、外面には丹を塗った痕跡が認められる。他の破片には内面に輪積みの跡が残っている。

117はG-Aトレンチ出土の二重口縁壺で、口縁部に浅い波状文を施し、逆卵形の胴に平底を有する。

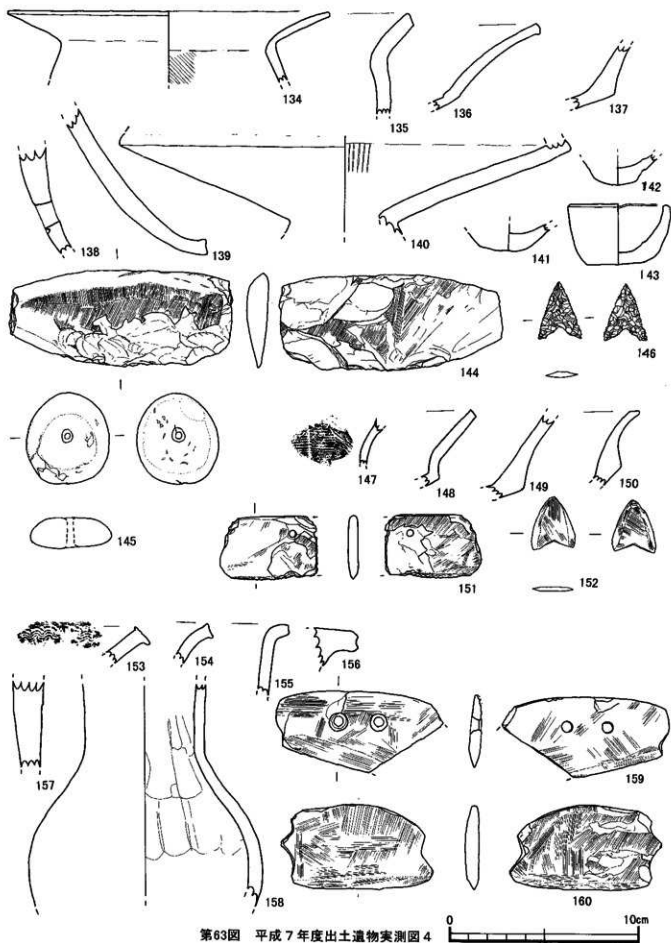
118～146はG-Bトレンチ1号住居出土遺物である。118～



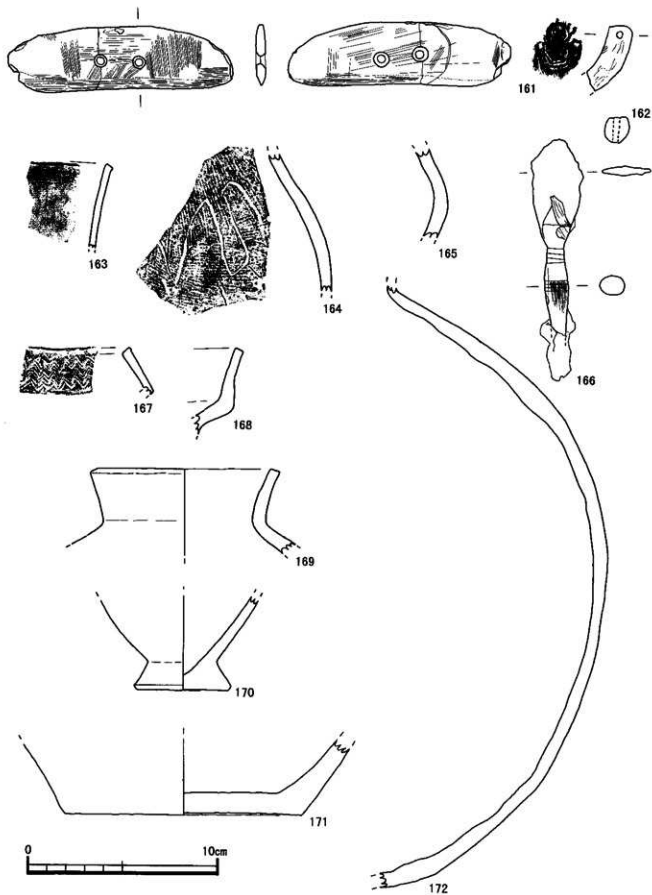
第61図 平成7年度
出土遺物実測図2



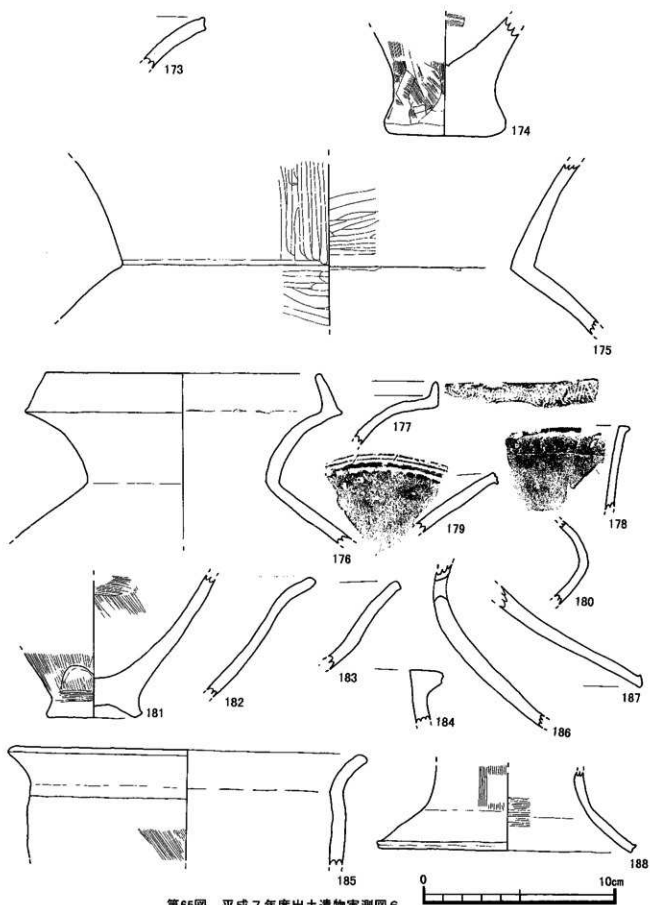
第62図 平成7年度出土遺物実測図3



第63圖 平成7年度出土遺物実測図4



第64図 平成7年度出土遺物実測図5



第65圖 平成7年度出土遺物実測図6

121は壺形土器の口縁部資料で、118は波状文に縦の突帯を有する。119、120は直線的な口縁部で端部に突帯を形成する。121は短く外反するものである。122は二重口縁壺の頸部、123は胴部に横方向に波状文と沈線を施し、124は縦方向に波状文を施す。125、126は長頸壺の胴部から底部である。127は小型壺で外面は胴部から口縁部を丁寧なナデ、口縁端に波状文を施す。内面は口縁端を横ハケ、頸部までを斜めのハケ、胴部をナデ、底部中央に直径8mmの段を有する。胴部最大径は胴中位よりやや下にあり8.7cmで、口縁径より広く、どっしりしたものである。128、129は台付鉢、130は鉢である。131～133は小型鉢、甕の胴部から底部である。134、135はくの字外反する甕の口縁部で134は薄く長く伸びる。136、137は高坏の坏部で屈曲部に段を有する。138、139は器台の脚で外面研磨、内面ナデである。140は器種不明で、逆ハの字に大きく開く頸部に口縁部が剥離しており、両面共ハケ調整されている。141、142は小型土器の底部で調整はナデである。143は手捏土器で口縁の端部に面を付けている。144は石庖丁未製品で全長11.9cm、幅5.1cm、厚み1.1cm、打ち欠いた後に研磨している。145は紡錘車で長軸4.9cm、短軸4.4cmの楕円形で厚み1.7cm、重量51.8gである。146は石鏃で全長3.1cm、幅2.3cm、厚さ3mm、重量1.4gである。

147～152は2号住居出土遺物である。147は小型の台付鉢と思われる内面はハケ、外面はハケ後ナデである。148、149は屈曲部に段を有する高坏の坏部で、148はさらに1段屈曲部を持つ。150は台付鉢で外面に段を有し、外反する口縁部の端を平らにする。151は石庖丁の半分で現長5.1cm、幅3.4cm、厚み5mm、重量17.2gである。152は磨製石鏃で全長2.9cm、幅2.3cm、厚さ2mm、重量2.1g、両面とも水平に研磨し刃部は両刃に研ぎ出している。

153～160は3号住居出土遺物である。153は波状文を有する壺の口縁、154は短く外反する壺の口縁、155は僅かに外反する甕の口縁、156は逆L字の甕の口縁である。157は高坏の脚で外面研磨、内面ナデで坏との接合部に幅広の段を持つ。158は長頸壺で外面はナデ、内面は頸部は指押さえ、胴下半はハケ後ナデである。159、160は石庖丁で、159は一部欠損し現長8.9cm、幅4.3cm、厚み6mm、重量31.9gで両面穿孔の穴を2個有する。160は全長8.1cm、幅6.6cm、厚み7.5mm、重量43.8gで、側辺の一方に2ヵ所の抉りを入れ他方に1ヵ所抉りを入れている。

161、162は4号住居出土遺物である。161は石庖丁で全長11.8cm、幅3.4cm、厚み5mm、重量35.9g、中央部に両面穿孔の穴を2個有する。162は土製勾玉で尾部を欠損し、現長3.7cm、幅1.2cm、重量7.2gである。全面研磨され、頭部に幅2mmの穴を空け、頸部3本、頭頂部に2本の沈線を入れる。

163は3号竪穴遺構出土の壺口縁部で端部に細かな波状文を施す。

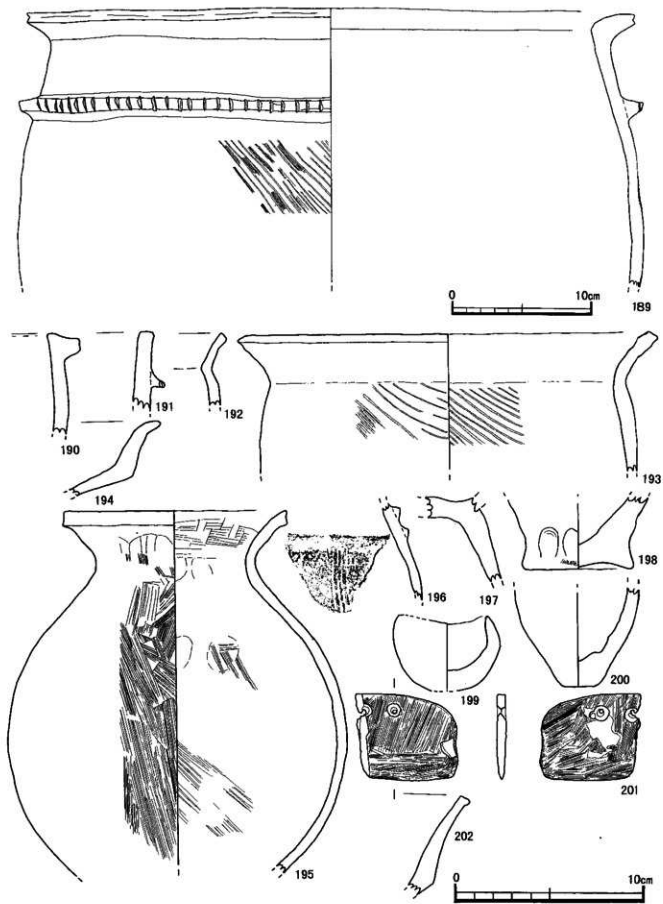
164は5号土壙出土の甕胴部で内面ナデ、外面はハケの後に絵画文を施す。

165は7号土壙出土の長頸壺の胴部である。

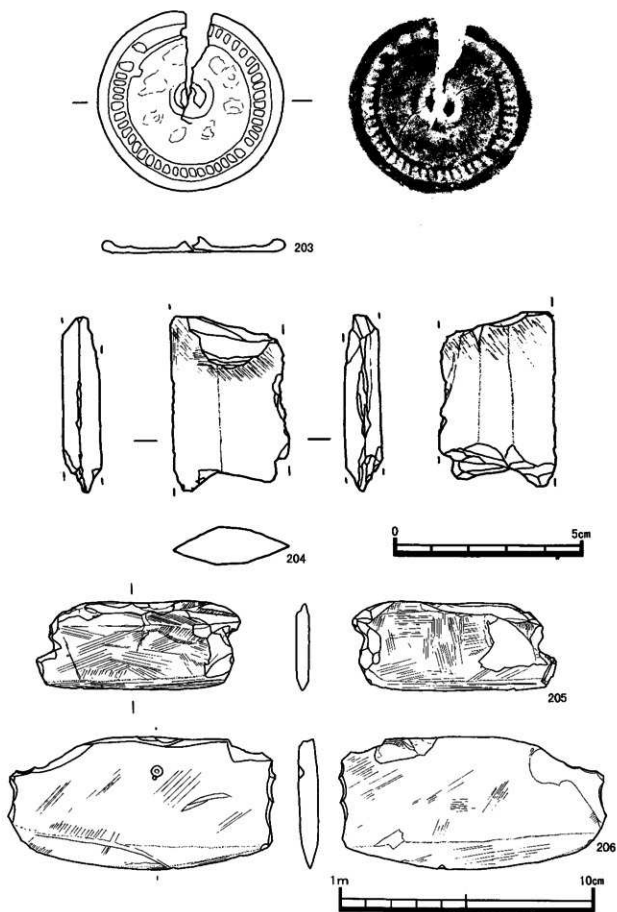
166は8号土壙出土の鉄製圭頭鏃で全長12.7cm、幅2.7cm、重量18.2g、矢柄を残している。

167、168は12号土壙出土の二重口縁壺で、167は内側に屈曲して波状文を施し、168は段を有し外反するものである。

169は14号土壙出土の短頸壺で調整はナデで口縁端を平らにする。



第66図 平成7年度出土遺物実測図7



第67圖 平成7年度出土遺物実測圖8

170～172は貯蔵穴出土の土器である。170は小型壺でハの字に広がる底部をもち、調整はナデである。171は壺の底部で調整はナデである。172は壺の胴部でほぼ球形になると思われる。調整はナデで、底部には絞りの跡が残っており、丸底に近いものと思われる。

173はG-Cトレンチ出土の壺の口縁で、口縁端から内面はナデであり、外面は縦方向の研磨で暗文を施す。

174、175はG-Dトレンチ出土の土器で、174は長く伸びる甕の底部で外面はハケ、内面はナデである。175は朝顔形に開く壺の頸部で、内面は頸部が横の研磨で胴部がナデ、外面は胴部が横の研磨で頸部が縦の研磨で暗文を施す。

176～188はG-Dトレンチ出土の土器である。176、177は二重口縁壺で波状文を施す。178は長頸壺で細かな波状文を端部に施す。179は直線的な口縁の先端に2条の沈線を入れる。180は小型の長頸壺の胴部である。181は高台状の底部を持つ小型の鉢で調整はハケである。182は鉢で口縁部をナデ、他はハケである。183は高坏の坏部で両面研磨され、屈曲部の段は不明瞭である。184は逆L字状の甕の口縁である。185は外反する口縁を持つ甕の胴部である。186～188は器台の脚で、186は緩やかに開き透かしを有し、187は大きく開く裾の端部を平坦にナデ付けている。188は直線的な脚部に外彎気味の裾が付くもので、裾の端部をつまみ出している。

189～201はG-Fトレンチ出土遺物である。189は逆L字状の口縁と刻み目を持つ貼付け突帯の大型の甕である。190は逆L字状の口縁の甕である。191は直行する口縁部と刻み目を持つ貼付け突帯の甕である。192、193はくの字外反する甕の口縁部である。194は二重口縁壺で口縁端部を外反させる。195は口縁部が短く外反する壺で底部を欠く。調整は内外面ともハケである。196は2条の貼付け突帯を有し、その下部に縦方向にハケで沈線状の施文をしている。197は高坏の脚である。198は甕の底部でナデ調整されるが指押さえの跡が明瞭である。199、200は小型土器で丁寧にナデられている。201は石庖丁で半分を欠損し、現長5.4cm、幅4.6cm、厚み4.5mm、重量22.6gである。両面穿孔の穴を2個有する。

202は地山切り通しのV字溝出土の高坏の坏部で屈曲部に段を有し、口縁端をナデ付けている。

203～206はG区表採資料である。203は一部をトレンチャーで欠くが直径4.9cm、紐の厚み3mm、重量15.0gの小銅鏡である。蒲鉾状の縁に櫛歯文帯、渦文と思われる盛り上がりが見られ、紐座に突線が廻るもので、欠損部の櫛歯文帯に径2mmの穴を穿孔している。小形仿製鏡第I型a類である。204は石剣の一部で、現長4.6cm、幅3.1cm、厚さ9.5mm、重量17.3gである。明瞭な錆は無いが、研磨による変化面が認められる。205は現長8.1cm、幅3.6cm、厚さ5mm、重量26.2g、206は現長10.6cm、幅5.3cm、厚さ7.5mm、重量75.4gの石庖丁で両側辺に抉りを入れるものである。

第三章 まとめ

今回の調査によって弥生時代から古墳時代にかけての新たな事実が多く明らかになった。

まず、弥生時代から見ていくと、V字溝を伴う集落がG区に形成されていることが判明した。その時期については、G-C、D、Fトレンチ下部から出土した暗文を施し朝顔形に開く須玖式の壺、城ノ越式の甕の底部、逆L字状の甕の口縁部から中期の中葉と考えられる。このことはBトレンチ出土土器からも裏付けられる。後期になると安国寺式や瀬戸内のな壺の口縁が見られるようになり、終末期には市内にある集落遺跡の源藤遺跡や土器焼成遺跡の中岡遺跡と共通する土器が見られるようになる。一方で、V字溝は埋まっていたようで溝の上部の黒色土層から出土した土器は概ね後期から終末期のものであった。この中期土器の出土層と黒色土層までは1.5m程ありその間には遺物は含まれないことから、中期の後葉から後期の前葉の間に断絶する時期があるのではないだろうか。

次に、表採品ではあるが重要な資料として石剣と小銅鏡がある。石剣は錆が広がっている点から茎に近い部分と思われる。北部九州に見られるものと同様の形態であることから中期ものと考えている。小銅鏡は小形仿製鏡第1型a類で文様に内行花文を持たず鍔しがりの良いものである。朝鮮半島の漁隱洞、坪里洞出土の鏡に酷似するが、手持ち資料の中では同范関係は判断出来なかった。また、同型式の小銅鏡は佐賀県の二塚山遺跡、大分県石井入口遺跡などで出土しているが、宮崎への搬入経路の解明が今後の課題として残された。

また、G区では、終末期以後の土器となると全くと言って良いほど見られなくなる点も注目される。このことは、二段掘土壌や鉄鏝を副葬する土壌等が住居を切っていることから、住居域から墓域としての利用へと台地の性格が変化したことを示している。

次に墓制について見てみると、弥生時代から古墳時代にかけて素掘りの土壌、二段掘土壌、横口式土壌、円形周溝墓、地下式横穴墓、円墳、前方後円墳と様々に出現する。弥生時代中期については不明であるが、素掘りの土壌、二段掘土壌は前記の理由から弥生時代後期後半から終末期にかけて出現すると思われる。

終末期になると二段掘土壌を主体部に持つ円形周溝墓が出現すると思われる。A区の13号墳周辺及びE区の1、2トレンチで二段掘土壌や円形周溝墓を検出し、その周辺で纏まって検出された土器（A-5トレンチ、E-1トレンチ、E-2トレンチ）は弥生終末期のものであり、A-5トレンチでは浅い溝状遺構の内部から器台、E-1トレンチでは広めの溝状遺構から器台と二重口縁壺、E-2トレンチでは溝状遺構（土坑か）から小型の土器群という内容は、供献土器と捉えることが妥当であると思われる。

二段掘土壌についての特徴はそのテラス部に石を置くことである。石斧、磨石、円礫と様々であるが丸みを帯びたものという共通性が認められる。ただ、9-2トレンチの主体部はテラスに粘土が貼ってあり鉄鏝を副葬するという変化があり、被葬者に違いがあると思われる。

また、横口式土壌は周溝内に検出されたもの（19-2トレンチ）、周溝を切る形のもの（E

ー2トレンチ)と単独のもの(C-2トレンチ)とあるが、前2者は周溝を意識した造りであることから円形周溝墓とほぼ同時期、後者は隣接する土坑出土の小型壺が平底で内面ハケの調整であることから弥生後期後半に比定出来る。

今回の調査でその存在が判明した地下式横穴墓については、完全に発掘調査したものは2基と少なく、堅壙のみの検出が4基であった。堅壙部の特徴としては方形であること、玄室(羨道)との境に閉塞石等の施設が無いことが挙げられる。玄室については羨道を持たないこと、平入りで葉巻状の形態を示すこと、玄室内部まで堅壙同様に埋土されており空間は検出されなかったこと、玄室が墳丘をあまり意識していない点が挙げられる。これらの特徴は、大淀川対岸にある下北方塚原地下式横穴墓群と比較するとその違いが顕著である。塚原のものは、羨門は石閉塞もしくは粘土を使った板閉塞で、羨道を有し、玄室は妻入りで長方形と定型化したものである。さらに円墳の墳丘の下まで玄室を掘り込んでいる。また、後期の地下式横穴墓は追葬を行う例が多いが、生目古墳群内の地下式横穴墓は玄室面積、埋土の在り方から追葬を意識したものとは思われない。以上のことから、生目古墳群内の地下式横穴墓は個人用の埋葬施設であり、羨道のない定型化される前のものと考えられることから、下北方塚原地下式横穴墓群よりやや先行する、5世紀中葉を初現と比定しておきたい。

横口式土壙と地下式横穴墓の関係についてであるが、堅から横という基本構造には違いが無いが、横口式土壙が長楕円の主体部の形態を二回りほど小さくした堅穴を持ち、主体部との境が段になっているのに対し、地下式横穴墓は長楕円の玄室に方形の堅壙で無段である。この堅壙部の相違が時間的変化であるのか、無関係であるのかは現状では不明である。

古墳本体については、5号墳の西側に周溝が確認され、3号墳との間の築堤状のものを共有していると考えられる。また、周溝は前方部の隅で収束する馬蹄形であり、3号墳、7号墳も同型のものと考えられる。

14号墳は周溝の検出は出来なかったが、くびれ部で葺石の落下が確認され、前方後円墳の確証を得た。

22号墳については、葺石を確認すると共に基段部整形の確認も出来た。さらに、前方部の落下した葺石の下から壺形埴輪片を多数検出したことは、壺形埴輪を主体とした埴輪列を巡らすタイプであると想定される。また、墳丘東側から後円部にかけて周溝を持ち、西側では地山を緩やかに削り落としているようである。出土した壺形埴輪片が4世紀後半の時期に比定されることは生目古墳群の成立時期や築造順を判断することに有意義である。また、22号墳の落下した葺石の数は、5号墳、14号墳のものとは比較にならないほど多量であり、その形態の差そのものであった。

9-1トレンチ出土の土師器の高坏は脚に2種類あるが、坏の形態から5世紀前半に比定出来るよう。

11-1トレンチ出土の須恵器の坏蓋、坏身(40~43)は陶邑のTK208に、坏身(44~45)はTK23に、高坏、壺、甕はTK208と同時期か1段階古くなると思われる。土師器の高坏、碗については出土状況より同時期と思われる。本トレンチは土地改良事業の際に旧表土を動か

されており、その後の耕作で土器が破壊されているが、土師器の高坏が完形になることから旧位置をさほど動いていないと思われる。つまり、11号墳または12号墳、もしくは周辺にある地下式横穴墓への供献土器と考えられ、その出現を考える上で重要な資料である。

以上、生目古墳群周辺遺跡発掘調査の内容を述べてきたが、これらのことから、宮崎平野の弥生時代から古墳時代にかけての時代のうねりの一端が窺い知れよう。台地上が環濠に囲まれた集落であった時代があり、集落が無くなり集団墓地化した時期が来て、前方後円墳が出現し、地下式横穴墓が造られる隔絶した空間となって行く。このことは、平野の集落の在り方が弥生中期から後期にかけての同盟関係の拡大、統合等による支配面積の拡大が権力者としての墓の独立を促し、幾内政権と結び付くことにより前方後円墳を築造するという、日本の歴史の大きな流れが、宮崎平野でも行われたという証でもあろう。

今後、史跡生目古墳群を整備するにあたり、単なる古墳の墳丘整備ではなく、弥生時代から古墳時代の跡江台地の変遷を踏まえた整備と今回残された疑問とを解明できる様な調査が行えますよう、皆様から御指導、御鞭撻頂ければ幸いです。

末尾ではあります、発掘調査にあたり御指導、御協力頂きました、西田健彦文化庁調査官、柳沢一男宮崎大学助教授、野間重孝宮崎市管財課課長補佐、地元の方々に厚くお礼申し上げます。

【付 記】

1. 22号墳の調査、須恵器、埴輪の編年については柳沢助教授に御教示頂いた。
2. 下北方塚原地下式横穴墓群の内容については野間補佐に御教示頂いた。

【参考文献】（順不同）

下北方地下式横穴第5号	1977	宮崎市教育委員会
宮崎考古 第7号	昭和56年	宮崎考古学会
源藤遺跡	1987	宮崎市教育委員会
中岡遺跡	昭和62年	宮崎市教育委員会
古文化談叢 9	1982	九州古文化研究会
季刊考古学 第43号	1993	雄山閣出版
古墳時代の研究 8 古墳Ⅱ 副葬品	1991	雄山閣出版
宮崎県史 資料編 考古2	平成5年	宮崎県史刊行会



図版1 2-2トレンチ地下式横穴墓



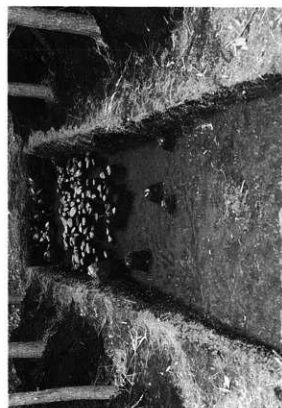
図版3 4-1トレンチ土器出土状況



図版2 3-2トレンチ二段階土墩



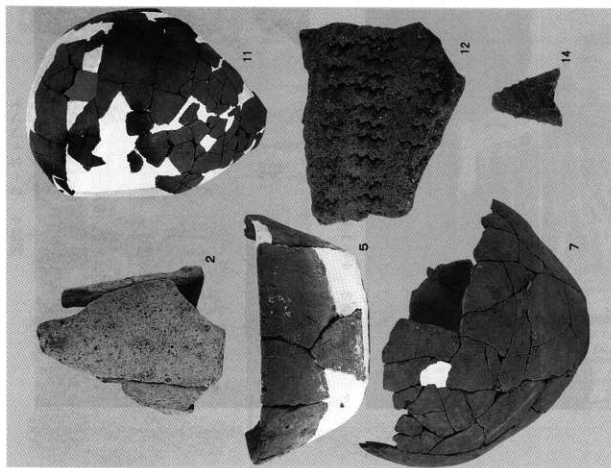
図版4 5-2トレンチ



図版5 5-4トレンチ



図版6 5-5トレンチ



図版7 平成7年度出土遺物



図版9 9-1トレンチ地下式横穴墓堅壁



図版10 9-1トレンチ地下式横穴墓玄室



図版8 平成6年度調査区全景